

前回は、1650 年代後半から 60 年代初頭の内山の窯業の再編に起因する窯場全体の大シャッフルのことにに関して、なぜか、じゃーライバルに成長する可能性を秘める波佐見とかはどういう戦略を取ったかって話になってしまいました。まあ、これで結果的に、有田に限らず、肥前窯業圏のすみ分けが完成したって話ですけどね。総合デパートとしての有田があって、波佐見やそれから準大手では三川内とか、そういうところが下級品に絞った生産に特化することによって、磁器の需要層のすそ野を下へ下へとどんどん開拓していくわけですよ。それに、窯が 1、2 基程度しかない零細の産地がすき間を埋めていくって構造かな。ということで、つまりは、中級品以上は有田が独占って構図です。

ついでですから、有田の中での勢力図についても、もうちょっと俯瞰的に説明しとくことにしましょうか。産業という意味での中核地は、もちろん内山地区です。製品ランク的には、その上に南川原山や大川内山の一部もありますけど、そんなもんは、大げさに言えば、研究所みたいなもんです。南川原山なんかで新製品開発の研究をして、やっと実ったなって思ったところで、内山で技術を増幅、増産させて、その中でより広い階層に落とし込める可能性があるものをピックアップして下級品の山なんかで量産する。そんで、その内山と下級品生産の山の間を途切れなくするために繋ぐのが中級品生産の山で、だから、逆に中級品生産の山の製品には、あんまり個性ってもんがないんですよ。上はほぼ内山と同等なもんだし、下は下級品の山の製品と似たようなもんだし、特に中級品と言えこれってもんがない没個性的な感じかな。

最高級品って意味では、南川原山だけでなく、大川内山の一部もあるんですが、ありゃ、ちょっと内山なんかのコンセプトに沿って量産ベースに落とし込もうとすると、古染付・祥瑞系古九谷がベースなので、技術の中身がちと複雑なので難しいでしょうね。染付製品では手数が多くなるし、色絵だと染付と上絵の組み合わせが原則なので、前に何かで話したように、窯焼きと赤絵屋の間で供用する設計図が必要になりますからね。

もっとも、いや技術以前に、藩窯製品だから模倣できなかったん…じゃないって言われそうですけどね…??だって、有田の岩谷川内山の藩窯の技術が移転して、大川内山の日峯社下窯跡が藩窯として築かれたみたいな話に、現在では世の中のジョーシキとしては、なってるんでしょ?いや、もちろん、岩谷川内山の技術が移転して、大川内山に窯場が開かれたってこと自体にサラサラ異存はございませんよ。でも、技術が移ると、必然的に藩窯まで移ることになるんですかねえ～??少なくとも文献史料なんぞには、藩窯が岩谷川内山から直接大川内山に移ったなんて記したもんはありまへんで。

でも、日峯社下窯跡で鍋島様式の製品が出土してるじゃんって言われるとお察ししますが、岩谷川内山に鍋島様式の製品があって、引き続き大川内山でもそれが作られたってのなら分かるんですけどね。残念ながら、岩谷川内山には鍋島様式の製品はないんですよ。それに、そもそも日峯社下窯跡に鍋島様式の製品があるからと言って、それが御用品であったってエビデンスはどこにあるんでしょうか??まあ、南川原山製品と並んで一番の高級品ですから、御用品として使われた可能性は高いとは思いますが。でも、少なくとも当時から鍋島様式が御用品の専用様式であったなんてことは誰が決めたんですかね??ということで、今のジョーシキとやらは、あまりに???が多すぎて、凡人には到底理解が及びませんわ。

これって、多分に「藩窯」って用語に、脳ミソが引っ張られてるような気がするんですけどね。「藩窯」って言えば、藩が1つの窯を直営していたようなイメージがありませんか。でも、これって新しい造語ですからね。本来の呼称は「御道具山」です。御道具、つまり御用品を焼いた窯場って意味です。御用品を焼いた窯場ですから、別に藩が窯全体を直営しなくてもいいわけですよ。もっと言えば、御道具を焼いた現場じゃなくて、御用品調達制度を担った役所があった場所って捉え方もできるわけです。だって、今だって何かの製品を発売している会社の所在地って、実際に物を作ってる工場じゃなくて、フツーは経営者のいる本社を示すでしょ。

いや～、いかな～。ちょっと鍋島に火が付いちやいような予感…。大川内山は伊万里市だか

ら管轄外なんであまり深入りしたくないんですが…。もっとも、もともと岩谷川内山から南川原山に移転して大川内山って言われてたのが、今では岩谷川内山から直で大川内山みたいになってきてるようなので、本当に南川原山を外していいんかいなって話はしとかないといけないかもですね。ということで、申し訳ありません。なかなか本題に戻れませんが、次回…、いや次回から…かな？御道具山についてちょっと触れようかと思います。（村）

有田の陶磁史 (355)

前は、本題に戻そうと、一生懸命有田の生産体制のことに持って行こうとして、うっかり大川内山のことに触れたもんだから、もう御道具山の話でもしとかないとしゃーないって状況になったところでした。また、ちょっとってか、ずっとそのような気がします、話が脇にそれますがご容赦を…。

ところで、最初に言っておきますが、前回触れましたが、古文書でおなじみの「御道具山」を、現在一般に呼ばれている「藩窯」という言葉で代替すると、頭がフリーズしてしまいがちですので、お気を付けあそばせ…。これは、あくまでも研究の過程上創作された、新しい呼称ですからね。なので、「御道具山」からイメージ膨らませるのはともかく、現代のように「藩窯」の用語からイメージ膨らませると、たぶん違った姿を想像されてそんな気がしますけどね。まあ、どう考えても、御道具山より藩窯の方が堂々として風格ありそうに思えるじゃないですか。でーんって藩が運営する立派な窯があって、そこで厳重な警戒のもと、秘かに鍋島って言われる御用品が作られてるみたいな…？

まあ、そういう意味では、藩窯って用語は、案外に落とし穴っぽいかもしれませんね。じゃあ、そもそも論みたいな話ではあるんですが、本日は、藩窯なるものの正体について触れてみようかな？

大川内山に、現在、「鍋島藩窯」と呼ばれている窯跡があります。まあ、肥前陶磁史かじってる人で知らない人はいないと思いますが。そんでです…。これって、皆さん藩が直営した窯だと思いませんか？？まあ、大概の人はそう思ってるはずですけどね。「藩窯＝藩の窯」って意味で付けた名称でしょうから。

じゃあ一次。その藩窯なる窯の中で御用品だけじゃなくて、それ以外も焼いていたってことをご存じの方はどうでしょうか？まあ、このブログの読者の方は、大川内山はごく一部の最高級品と多くの最下級品の組み合わせだったって話を、常々してますのでご存じだとは思いますが…。そうなんです。実際に御用品を焼いたのは、登り窯の焼成室2、3室程度で、その他の多くの焼成室では、最下級品が焼かれてたんです。

そんで次っ!!この藩窯なるところでは、御用品の製作に携わっている陶工は、有田から時々上手な人が選ばれて雇われているわけです。つまり、藩から給料貰っている、いわば準公務員です。ここまではよろしいでしょうか。ということは、同様に藩が所有権を持つ藩窯に関わっている人たちならば、その他の人たちも同じように準公務員のはずですよ。部署が違うだけで。

ところが、御用品生産以外に関わっていた、その他大勢のいわゆる「お助け窯」や「お手伝い窯」なんて言われる部署の人たちは、残念ながら藩からは給料貰ってないんですよ。理不尽でしょ。いくら立派な御用品には関わってないと言っても、こういう不公平はあきませんで…って思いませんか？

じゃー、なぜ現実的にこういうことがまかり通るかということなんですが、別に封建制度だったからじゃないですよ。まあ、ここが脳ミソ柔らかくして考えてねってキモです。

ところで、窯業に関わる古文書なんかには、時々「一窯」なんて記されていることがあります。当時の本焼き窯は登り窯ですので、当然、「一窯」と言えば一つの登り窯のことを指します…って言いたいところなんですが、これが違うんだな～。そもそも、そもそも登り窯という

のは、現在の工房内にある窯のように、一個人や一業者の所有ではなく、所有者がたくさんいる共同窯です。したがって、登り窯の所有単位は個々の焼成室であって、「一窯」というのは、実は、個別の焼成室のことなんです。ちなみに、登り窯全体の場合は、「一登」と言います。

ねっ、もうお分かりでしょうか？ そう、藩窯なるもので藩が所有していたのは、「一登」ではなく、「一窯」×2、3室ってことです。ならば、その2、3室に関わる人には給料払うけど、それ以外の人に給料払わなくても当たり前。雇用関係のない単なる民窯の人たちなんです。大川内山って言っても、有田の皿山代官が管轄する単なる一つの山に過ぎないってことです。まあ、むしろ御道具山の方が民窯の間借りってことですよ。

どうです？ 藩窯ってイメージとは随分違いますか？ ？ 藩が間借りしていた窯室というのと、藩が直営していた窯というイメージからスタートするんじゃ、この後の論の展開はずいぶん違ってきそうだと思いますか？ ということで、本日はここまでにしときます。（村）

有田の陶磁史（356）

前回は、「藩窯」なるものの正体についてお話ししてみましたが、実は「藩窯」の用語からイメージされるものとは似て非なるものだったんじゃないでしょうか。分かりやすいように、一般的に「鍋島藩窯」と呼ばれている大川内山の例でお話ししましたが、これは最初の藩窯…、いや、御道具山のあった岩谷川内山でも変わりませんっていうか、最初ですから、もっと初源的なスタイルです。

岩谷川内の御道具山については、ずっと前に古九谷様式の話のところで、1回、いや2回、いやきっと何度も話していたと思いますが覚えてらっしゃるでしょうか？ 明治期に久米邦武が記した『有田皿山創業調子』に所収された「源姓副田氏系圖」という項目で触れられているもので、今は一般的に言われている説はずいぶんこの内容から乖離してしまいましたが、以前はこの内容を

元に藩窯なるものが語られていました。前は、古九谷様式的視点で話しましたが、御道具山の視点では話してなかったと思うので、少しおさらいしとくことにしましょうか。

系図に登場する副田家の初代は喜左衛門日清と言います。言い伝えでは、京都の浪人だったと記します。その後、取り立てられた時、某国の副田村の出身だったため副田と称したと言います。慶長・元和（1596～1624）の頃、他の地域から松浦（佐賀県西部から長崎県北部あたりの地域）に渡って、伊万里・有田のところで焼いてたところ、陶業に造詣が深い京都の浪人善兵衛と出会って兄弟の契を結んだと言います。それで、つてを得て内野山に赴いて、例の高原五郎七さんという名譽の焼物師の弟子になって数年付き従ったけど、五郎七さんはケチでいっこうに奥義を教えてくれなかったそうです。

その後、岩谷川内山に移って、五郎七さんは青磁を焼き出して世に出したと言います。そして、珍しい器を数々焼いて献上をはじめたとします。その頃、青磁の製作方法は誰も知らなかったなので、岩谷川内で自称御道具山と唱えて献上したんだと言う内容です。

以前、お話ししましたが、この「青磁」なるものを、いわゆるフツーの「青磁」だと解釈する限り、この文献の内容は矛盾だらけで理解できません。だって、岩谷川内山で一番古い窯場は猿川窯跡ですが、それでもせいぜい1630年代前半から中頃の成立ですので、もうとっくに青磁なんてほかの窯場で完成してますよ。

実はというか、ずっと前にも触れてはいるはずですが、五郎七さんは、これとはまったく違う場面でも有田関連の文献に登場します。『酒井田柿右衛門家文書』とかにあるものですが、元和3年（1617）に南川原皿屋にきたって話です。そうそう、泉山発見したって話に続くやつです。そんで、三川内の『今村氏文書』にもありますが、柿右衛門も五郎七さんの弟子になってましたということらしいです。

青磁の完成はおそらく1620年前後ですので、こちらの記述の内容であれば、フツーの青磁を開発しましたってことで、バッチリ年代的に合います。でも、御道具山がらみですとさすがに年代的にムリでしょ。だって、例の山本神右衛門さんが寛永14年（1637）に窯場の整理・統合を主

導した時ですら、藩主を山林保護だって半分騙してやったくらいですよ。まだ、藩なんて窯業にまるで感心なして時期ですから、御道具山なんてとてもとても…。山が荒れるので陶工追放って再び江戸の藩主から命令が出て、擦った揉んだのあげく皿屋代官が成立するのが正保4年（1647）ですから、まあ、藩が本腰入れるのはそれからです。だから、「青磁」がらみで、案外二人の人物の話がごちゃ混ぜになってるのかもですね。

しかも、しかも、です…。慶安4年（1651）からは將軍家への例年献上がはじまりますので、ここじゃ御道具山が成立してないといけないので、年代的に後ろも詰まってるんだな～。つまり、副田氏関連の記述の「青磁」は、1640年代後半頃の話って考えないとつじつまが合わないわけですよ。

ということで、この後まだまだ込み入った話が続きますので、とりあえず、本日はここまでにしときます。（村）

有田の陶磁史（357）

今回は、岩谷川内御道具山関連で、高原五郎七さんの開発したという「青磁」なるものの話をしている最中でした。

元和3年（1617）に南川原皿屋に移り住んで、その後泉山を発見したとする五郎七さん（仮A）ならば、1620年前後に完成したと考えられるごくふつーの青磁の開発に携わっていても別に不思議じゃありません。ってか、五郎七さんは有田関連だけでなく、あっちゃこっちゃに出没しますが、どこでも伝説の名工扱いですから、青磁くらい開発しても驚きはないですね。

しかし、岩谷川内山で「青磁」なるものをはじめて開発して献上し、自ら御道具山を名乗った五郎七さん（仮B）の方の青磁は、本当にふつーの青磁なんじゃないかな～？だって、前回お話ししましたが、皿屋代官が新設されて藩が窯業を正式に藩の産業として公認するのが正保4年（1647）のことで、まあ、江戸の殿様なんかはそれまでさして関心を寄せなかったわけですが、佐賀の藩庁ですら窯業の重要性に気付いたのは、寛永14年（1637）の窯場の整理・統合以後の

ことです。ですから、そんな状況で青磁の開発時期である1620年前後に、藩が御道具山設立なんて発想するのでしょうか？つーか、その頃、岩谷川内にまだ窯場自体ないんですけどね。ついでに言えば、寛永16年（1639）には、佐賀藩の最後の支藩である蓮池藩ができてるんですが、分け与えるにも、もうまとまった領地がないので、藩内であっちゃこっちゃ小口の領地をかき集めて与えてるんですが、何とその中に有田も入ってるんですよ。窯場の整理・統合後のことですからね。それでも気前よく支藩にくれてやったのは、やっぱ窯業なんてまだ打ち出の小槌だと思っ
ないからですよ。蓮池藩は現在の佐賀市内にあったので、有田なんぞは遠くて不便なので、その後、自領に隣接する場所と領地替えしてもらって、再び本藩領にはなるんですが…。だから、買い戻しはあくまで蓮池側の事情であって、別に窯業が云々って話ではないんです。蓮池側だって、窯業なんてまだ関心なかったんで、やっぱ近いところに替えてねってことでしょうか。

ところで、御道具山の成立は、前回ちょびつと触れましたが、下限は慶安4年（1651）に3代将軍家光に、例年献上を開始するにあたり事前に内覧してもらった時ですから、それ以前に組織が整えられたのは確かです。ちなみに、家光って、この内覧の最中に突如震えがきて意識失って、結局意識が戻ることなく亡くなったって言います。脳卒中？かってことですが、そんな衝撃的な器だったんでしょかね～？？

じゃあ上限はどうかって言えば、1644年の明から清への王朝交代の混乱で磁器輸出が滞る以前であれば、実際に中国磁器を買って献上したりしてるんですから、別に御道具山を開設する必要なんてないんです。どう考えても、その頃の有田磁器なんぞは、景德鎮磁器の足もとにも及びませんから、代わりになんてならないですしね。つまり、御道具山は中国磁器の入手が困難になる1640年代中頃以降ってことです。これで、だいぶ成立時期の可能性の幅が絞られてきましたね。

そんで、最初は五郎七さんBが勝手に献上して、勝手に御道具山を名乗っただけですので、その時点ではまだ正式御道具山ではないです。それから、実は正保4年の最終的に皿屋代官の創設に繋がる陶工追放のすったもんだの際に、家老の石井さんに最初に佐賀藩庁まで呼び出されたのが、皿屋の主だった窯焼きと副田喜左衛門さんでした。喜左衛門さんは前回お話ししたとおり五

郎七さん B の弟子で、次回にでも詳しくお話しますが、五郎七さん B が夜逃げした後に、正式に御道具山役に取り立てられた人物です。あえて喜左衛門さんが、皿屋代表団の一員として呼び出された理由としては、その時点ですでに御道具山役を務めていたからとしか考えられませんので、1647 年にはすでに御道具山が設置されていたことになります。ですから、まとめて考えると、御道具山の設置は、1640 年代後半でも、47 年以前ということになるわけです。これで、最大でも 2、3 年の幅には絞れました。

いや～、今日は前回の話に肉付けしてたら一步も進みませんでした、まだ長くなりますので、本日はここまでにしときます。（村）

有田の陶磁史 (358)

前回は、前々回の話を補足していたら、一步も前に進みませんでした。まあ、そういうこともある…?? いや、そういうことだらけではあるんですが、でも、1 週間もすると書き忘れたことを思い出しちゃうんだからしゃーないんだな～。というわけですが、今日はちょびっとは進めるように務めます。

前回のまとめで、結局、御道具山は 1640 年代後半かつ 47 年以前でしょうって話をしました。ここで思い出していただきたいのが、正式御道具山の成立以前にはワンクッションあるってことです。そう、五郎七（B）さんの自称御道具山です。

そうすると、前回お話ししたように、それ自体中国がコケる前では話が矛盾しますし、それ以前に佐賀藩では中国磁器を買って将軍家に献上したりしてますので、それよりあまり劣るものではないって話になるでしょ。

つまり、献上品の原点なる五郎七（B）さんの“青磁”なるものは、中国磁器がコケた頃にはじまり、かつ、中国磁器とだいたい肩を並べるくらいのもんでないとあかんってことです。そうすると、結論は一つしかないでしょう。だって、まさか初期伊万里様式で、中国磁器の代用なんてできるわけないもん。根本的に製品のスタイル自体違うわけですから。

何だか、話がまたかつての話に戻ってしまうようですが、この頃に、中国、とりわけ景德鎮磁器と同等品を目指して開発されたものと言えば、そりゃ古九谷様式しかないでしょ。だから、五郎七（B）さんの“青磁”なるものは、五郎七（A）さんの頃の“青磁”とは別ものってことですよ。（A）さんの頃の青磁って、もちろん初期伊万里様式ですからね。

じゃあ、（B）さんの青磁って何っですが、それこそ前に古九谷様式の話のところで触れた、鍋島報効会所蔵のアレ（<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/225159>）しかないでしょ。例の景德鎮製の祥瑞とそれに倣った…、いや、忠実にコピーしようとしたって方が正しいと思いますよ。有田製の大皿をセットで鍋島勝茂に献上したっていう「色絵山水竹鳥文輪花大皿」ってやつですよ。有田のは緑絵の具を内面全体には掛けきれてませんが、景德鎮の方は、全体を緑絵の具で塗り潰したまさに青磁そのもの。色絵も古九谷様式で実現した技法の一つですしね。

つまり、想像できるストーリーとしては、五郎七（B）さんが古九谷様式を開発して、当然メチャ珍しかったわけですから、それを手本とした景德鎮の祥瑞とともに、「こんなんでできるようになりました。」ってことで「どうじゃーっ！！」みたいに献上した。まあ、赤絵の具はまだうまく発色してないし、緑絵の具は祥瑞とソックリには塗り潰せなかったけど、そこはご愛嬌ってことで…。とりあえず、景德鎮製品とほぼ同じもんができたんですから、まずは藩主にお披露目して、褒められたんで、自ら御道具山を名乗ったくらいのとこじゃないですかね。だから、古九谷様式も御用品という意味での鍋島も根っ子はいっしょってことです。

ということで、何だかこれからの展開としては、以前お話ししたことと同じようになるかも？ですね。まあ、でも献上用製品目線では話してないですからお許してください。とりあえず、何度でも同じ話を目にすると理解が容易になりますしね。と、自らを擁護する…。とりあえず、本日はここまでにしときます。（村）

前は、高原五郎七（A）さんの“青磁”と、同（B）さんの“青磁”なるものはまったくの別物で、（A）さんのは正真正銘の青磁だけど、（B）さんのは実は古九谷様式の色絵磁器だったんじゃないでしょうかね～って話をしてました。続きです。

ちょっとここで、今までの話の中で、どこまでが原典となる『源姓副田氏系圖』に記されているもので、どこが筆者の妄想なのかをはっきりさせとくため、小難しくて読むのめんどくさいでしょうが、ちょっとだけ原文を引用しときます。ちなみに旧字体は読みにくいので、今風に直しておきますね。

五郎七（B）さんが、副田喜左衛門日清と善兵衛を弟子にしたのに、ケチでゼンゼン奥義を教えにくんないみたいな記述に続いてですが、

「其後有田岩谷川内へ移リ青磁ヲ焼出シ世上二発向ス其頃御献上始リ珍器品々焼立被 仰付青磁ノ法人不知ニ依テ岩谷川内へ御道具山ト相唱立差上ル然ルニ切支丹宗門御穿鑿嚴敷五郎七邪宗門ノ聞ヘ有之御捕アル由承リ付前夜逃去行方不相知青磁諸道具跡モナクハ谷ニ投捨置シヲ日清善兵衛ヲ引供シ青磁素焼物等拾集水干シテ相考青磁土兼テ打出ス所ノ道筋尋届色々工夫ヲ以漸サトリ再ヒ焼出シ御用相成通出来立候末日清ハ手明鑓ニ被召成御道具山役仰付ラレ善兵衛ハ細工人頭取ニ仰付ラル」

ねっ、ひらがなバンバン入っている現代文に慣れてると、やっぱ読みにくいですよ。ずっと前に古九谷様式のところでもお話ししたような気もしますが、ごつつ重要な内容なので軽く説明しときましようか？

え～っと！最初のあたりは、まとめると、これまでお話ししてきたように、五郎七（B）さんが、岩谷川内で“青磁”なるものを焼き出して献上し、御道具山を名乗ったって話ですから、お分かりだと思います。

ところが、五郎七（B）さんはキリスト教徒だったみたいで、逮捕されまっせって話が耳に入ってきたんで、逮捕前夜に逃亡を図って行方不明になったみたいですね。でも、そこはドケチな五郎七（B）さんのことなんで、極秘にしてた“青磁”なるものに関する諸道具類は、技術がバレないように、すべて谷に投げ捨てたって言います。せっかくだから、喜左衛門さんや善兵衛さんに教えとけよ～って言いたくなりますが…。ほんとケチ！！

まあ、五郎七（B）さんは、岩谷川内の猿川窯跡を使ってたはずですから、ふつつ考えたら隣接する猿川って谷川にでも投げ込んだんでしょうけど。その後の文章に拾って水干ししたってありますしね。有田に住んでると、ああ、猿川のあの辺りかって、だいたい想像できるんですけどね。

だから、当然喜左衛門さんと善兵衛さんにも、捨てた場所は分かってたはずですよ。五郎七（B）さんが投げ捨てたと思われる小路から川面までは結構深い谷になってますが、別に水深自体深い川じゃないですから、川面を上流へと遡っていけば行けないところじゃないですから。

ということで、残りの文章はもう少しなんですが、その割に込み入った話をしないといけないので、途中で、今回はこのあたりまでにしときますね。（村）

有田の陶磁史（360）

前回は、『源姓副田氏系圖』の一部を引用して、軽くその説明をしてるところでした。でも終わんなかったんで、本日はその続きからはじめます。

高原五郎七（B）さんは、弟子の副田喜左衛門さんや善兵衛さんにも教えずに、コソコソっと“青磁”なるものを開発して、藩主の勝茂さんなんかに献上したりして御道具山を名乗ってたんですが、切支丹の取り締まりがあるって聞いて、“青磁”なるものの道具類とか一切を谷に投げ捨てて逃げたんです。

本当に、弟子くらいには教えてあげればいいのにね。器の小さいやつ！でも、その苦境にもめげず、喜左衛門さんと善兵衛さんは立ち上がったのです。五郎七（B）さんの捨てたもんを探しに行きたんですね。

前回お話ししましたが、猿川なんてそんな水深が深い川じゃないですから。いや、川なんて言えば、1級河川とか想像されたら困るんですが、そんなご大層なもんじゃありません。溝、溝。有田をご存じの方なら想像も付くかと思いますが、有田を流れる有田川って伊万里湾のところで海に注ぐわけですが、内山地区あたりはその水源に当たるところです。各地のほぼ溝みたいな小川が集まって下流で有田川になってるわけで、猿川もその一つです。せいぜい川幅数メートルとか、そんなもんです。だから、川を堰き止めないといけない唐臼なんかが造りやすいのでいっぱいあったわけです。

流紋岩の岩山の間を流れる川ですから、崖は高めでも、肝心の川の水は川底近くを流れるだけで、平時にはさして水量は多くありません。それなんで、道具類を捨てたらすっかり流される…みたいなことはなくて、別に場所さえ分かれば、探しに行けたわけですよ。

そして、ここからが重要です。ちなみに原文では、「日清善兵衛ヲ引供シ青磁素焼物等拾集水干シテ相考」となっています。つまり、“青磁”なるものの素焼きなんかを拾い集めて水干しして考えたってことです。

ちょっと読み飛ばしてしまいそうですが、よ〜く、よ〜く文章の意味をイメージしてみてください。“青磁”をふつーの青磁だと思う限り、絶対に意味が通じませんから…。

だって、青磁って素焼きした素地に青磁釉を掛けて本焼きすると完成品になるわけだよ。だったら、青磁の素地は特殊ってわけじゃないので、素焼きの状態では青磁じゃないわけですよ。それに、素焼きって、成形した生地を低温焼成したもんですから、水になんて浸けたら、水干ししようにも速効溶けてしまいますよ。しかも、そんな素焼きを見て、喜左衛門さんや善兵衛さんに何を考えろっていうんでしょうか？素焼きは、上から見ても下から見ても、斜めから見ても、いくら穴の空くほど見ても素焼きですから。まあ、それ以前に、前にご説明したかと思いますが、素焼きは例

の喜三右衛門さんとこの技術で完成するもんですから、五郎七（B）さん時代には、まだありまへんがな。つまり、焼成は青磁釉を掛けて焼く時の一回だけですから、「素焼物」ってものの自体存在しないわけですよ。

ねっ、意味通じないでしょ。じゃー、このブログでご説明したとおり、五郎七（B）さんの“青磁”なるものって色絵のことじゃないってことで考えてみると、いかがでしょうか。色絵素地なんかを拾い集めて水干しして考えたってことになるでしょ。色絵素地は、素焼きじゃなくて本焼きしているものですから水になんて溶けませんからね。それに、ちまたで作ってる初期伊万里様式の製品とは、スタイルも胎土の質も違いますから。そりゃ、喜左衛門さんや善兵衛は唸るほど考えなきゃなんないでしょ。上絵の具なんかのことも考える必要がありますしね。

ということで、今日も文書の一節が進んだだけで終わりませんでした。まだ続きそうなので、ここら辺で止めときます。（村）

有田の陶磁史（361）

今回は、高原五郎七（B）さんのいうところの“青磁”が、ごくふつう青磁、つまり英語でいうところの“celadon”の意味だったら、絶対に『源姓副田氏系圖』に記される内容は意味つーじねーんじやないって話をしました。何しろ副田喜左衛門さんと善兵衛さんは、五郎七（B）さんが谷に投げ捨てた“青磁”の素焼物なんかを拾い集めて考えたってことですが、“celadon”がはじまった頃に作られていたのはバリバリ初期伊万里様式の製品で、まだ素焼きなんて技法は影も形ありまへんがな。それに、そんな頃に御道具山をはじめようにも、中国磁器との落差があり過ぎて、將軍さまにナメとんのか、いらねーって言われるのがオチ。やっぱ、五郎七（B）さんの“青磁”は、古九谷様式の色絵磁器以外にはチョットね～。とは言え別に何らかの確証があるわけでもないの、どなたかもっとシックリとくる捉え方があれば、ぜひ教えてくださいな。

でも、前にこれがまさに最初の“青磁”じゃないってことで取り上げた、鍋島報效会所蔵の景德鎮の“祥瑞”と古九谷様式の“祥瑞手”の大皿のセットって、緑ジャブジャブだけど、青絵の具なんてまったく使われてないじゃんって不粋なイチャモンはおやめくださいな。だいたいその頃は中国自体、青の上絵の具なんて使ってないんですから。青絵の具関係な〜し。だって、たとえば青々とした木々とかいうじゃないですか。木々の葉っぱって青いですか？？それとか…、クソド田舎の車もほとんど通らないような道路にしか取り残されてないので今の若者には通じないかとは思いますが、青色発光ダイオードが使われる前の青信号は青じゃなくて緑だったでしょ。つまり、“青磁”=“緑磁”ですよ。

てなことを話していると一向に先に進まなくなるのでこの辺にしときますが、青磁素焼物を拾い集めて考えた喜左衛門さんと善兵衛さんは、続いて「青磁土兼テ打出ス所ノ道筋尋届色々工夫ヲ以漸サトリ再ヒ焼出シ」と記します。まあ、これは象徴的なもんを掲げただけで、何しろ五郎七（B）さんは何も教えてくんなかったので、原料から、成形技法から、あれこれ再現しないといけなかったはずです。

まあ、当時のボディーの原料は泉山陶石ですので、その中でどのあたりの石が適しているかはあったでしょうが、まさか五郎七（B）さんも、工房内にある陶石から粘土まで全部は谷に捨てられなかったでしょうから、ボディーの原料は取りあえず確保できたんじゃないでしょうか。ただ、成形が初期伊万里とは違いますので、そこら辺はちょっと工夫が必要だったかも？特に御道具の場合は、ハリ支えしないので、高台をへたらせないようにしないといけませんから。つーか、まだハリ支えの技法は開発されてないか、その直後くらいだったと思いますけどね。

たぶん、ハリ支えは山辺田窯跡で開発されたもんだと思いますが、古九谷様式の製品を商業ベースで量産することを目指した窯場ですので、ハリ支えで高台内にチビッと傷が残るくらいは大目に見てよって感じですよ。

やっぱ問題は、上絵の具の材料と調合とかかな〜？？最終的に赤絵窯で焼くことは、さすがに窯まではうち捨てられないので分かってたはずですからね。

後の鍋島様式の製品もそうですが、御道具の場合、基本的に使用する上絵の具は、赤、緑、黄の三色です。当時は絵の具屋さんはないので、自分で作らなくちゃいけないですから。この中で、赤と黄の呈色材は鉄ですから結構手に入りそうですが、緑は銅ですから鉄よりは苦労しそうです。ただし、製陶材料としての銅は当時も使われてましたから、探せば探せたんでしょうね。例の赤く発色させる辰砂ってやつがそうです。

ただ、単純に呈色材が手に入ったら絵の具ができるってわけじゃないので、やっぱ相当苦労はしたんじゃないでしょうかね。だから、先ほどお話しした鍋島報効会の祥瑞手の大皿なんて、赤絵の具なんてまともに発色してませんからね。緑はダラダラですし…。

ということで、大して進みませんでしたけど、本日はここまで。（村）

有田の陶磁史（362）

前は、まあムリクリってか、そうとしか考えようがないわけですが、高原五郎七（B）さんの“青磁”なるものは実は古九谷様式の色絵磁器のことで、もしかしたら、つーか、もしかしなくても、その最初期の製品が初代藩主鍋島勝茂旧蔵と伝えられる、例の鍋島報効会所蔵の祥瑞と祥瑞手が組になった大皿だったので話をしてました。「どうじゃい！景德鎮と同じもんができましたぜ！！」ってので献上したみたいな…。

その五郎七（B）さんが作ったのかもって祥瑞手の方は、“青磁”の名称の由来ともいえる緑絵の具はオマケ程度にしか使ってませんが、手本とした景德鎮の祥瑞の方はまさに“ザ・セイジー”ってほど、緑絵の具で塗り潰してますよね。

でも、五郎七さんも、本当は手本の祥瑞皿と同じように、ベターって豪快に緑絵の具で塗り潰したかったんだと思いますよ。だって、形状や下絵はほぼカンコピ、上絵の具でも黄や赤は発色はイマイチとはいえ、同じように塗ってるわけですよ。でも、緑のベタ塗りだけは、まだ技術が未熟でできなかったわけですから、きっと悔しかったでしょうね～。

もしかしたら、前に古九谷様式について話した際に触れているかもしれませんが、この緑のベタ塗りができなかった悔しさのリベンジとして開発されたのが、実は上絵の具で器面を塗り潰すいわゆる“青手”だと思うんですけどね。よく言われる、素地が粗質で汚かったからなんてのじゃなくてね。

実際に伝世品なんかだと、青手の一部の種類は、メチャキレイな素地を使ってますし、現実的に、同じ白磁素地を使っている五彩手も多いわけですから。素地を焼いてみたら、ちょっとこっちは汚く上がったんで青手用、こっちはキレイに上がったので五彩手用みたいに分けたとか…、なんてことするわけないでしょ。そんな焼成時の偶然に任せてたんじゃまるで生産計画が立たないの、産業としては成り立ちませんよ。

おっと、またいらんこと話し過ぎて、前に進まなくなるところでした…。

とりあえず、その後五郎七さんは逃亡したので、弟子の副田喜左衛門さんと善兵衛さんは五郎七(B)さんが、谷に投げ捨てたもんとかを拾い集めて、研究を重ね、やっと再現に成功したんですね。めでたし、めでたし。

そんで、「再ヒ焼出シ御用相成通出来立候末日清八手明鍵二被召成御道具山役仰付ラレ善兵衛八細工人頭取二仰付ラル」って記されるように、「御道具山」を正式に制度化し、喜左衛門さんを手明鍵（てあきやり）っていう佐賀藩士に取り立てた上で御道具山役に、善兵衛さんは細工人頭取に任命されたってことです。まあ、喜左衛門さんが佐賀藩御道具山支店の支店長、善兵衛さんが工場長ってとこですかね。

だから、言ってみれば支店長が席を構えるところが御道具山支店であって、それは必ずしも善兵衛工場長が現場を取り仕切るとこじゃなくてもいいってことですよ。まあ、御道具山支店っていうお役所ってことであって、登り窯のことを指し示すわけじゃないってことです。さらに言えば、善兵衛工場長が所管するのも、製土から焼成までに至る一連の御道具製作の現場であって、地域の生活全般を統括する皿屋代官じゃないんですから、一つの登り窯に関わる民間の商業活動まで含め

た工場長ではないわけです。つまり、こないだお話ししましたが、“藩窯”って呼ぶから藩が登り窯自体を所有したかのような錯覚を覚えて、イメージ的に間違えるってことです。

ちなみに、手明鑓っていうのは、たぶん佐賀藩に独特な身分だと思いますが、戦時には槍一本具足一領で軍役を担うってもので、正式な侍身分である平侍の下で、手明鑓の下にはさらに徒士、被官、足軽、又被官なんて階級がありました。金ヶ江三兵衛さんもそうですが、武士階級に取り立てられた有田の陶工に多かったのは被官ってやつですから、それよりも格上ってことです。

とりあえず、この正式御道具山の制度ができたのが、中国で明がコケて磁器が手に入らなくなり、代わりに五郎七（B）さんが同様なものを開発して勝手に御道具山を名乗ったけどトンズラした後、下限は皿屋代官制度の創設に連なる陶工追放命令が出された際に、喜左衛門さんが家老の石井兵庫さんに、佐賀まで呼び出された時以前ってことになるので、年代的には 1645～47 年くらいのどこかでしょうねってことです。

ということで、またまた今日も、ほぼ足踏み状態でしたけど、とりあえず、本日はここまでにときます。（村）

有田の陶磁史（363）

前は、あまり進みはしませんでしたけど、たぶん御道具山が 1645～47 年の間くらいにできて、その御道具山役という支店長に、手明鑓という武士階級に特進の上で、副田喜左衛門さんが抜擢され、細工人頭取という工場長には、喜左衛門さんと義兄弟を誓った善兵衛さんが就任したって話をしてました。続きです。

ということで、まずは押さえておいていただきたいんですが、これまでゴチャゴチャとお話してきたことを総合すると、古九谷様式のはじまりイコール、色絵磁器のはじまり、そして…、ほぼイコール御道具山のはじまりってことになります。つまり、御用品のことを“鍋島”と通称します

が、岩谷川内御道具山時代の“鍋島”は“鍋島様式”ではなく、スタイル的には“古九谷様式”だったってことです。ややこしいですね。

これがちょっとややこしく感じるのは、多くの方が“御用品”＝“鍋島”＝“鍋島様式”ってイメージを持っているからです。“鍋島様式”のことを省略して、“鍋島”って呼んだりするので、ますますややこしくなります。でも、本当は“御用品”＝“鍋島”というのが本質的な定義であって、製品の様式は一義的な要件ではありません。つまり、御用品のことを“鍋島”と通称しているんですから、別に鍋島様式でなくても、御用品として使われれば“鍋島”ってことになるわけです。なので、岩谷川内御道具山時代のように製品のスタイルとしては古九谷様式であっても、鍋島様式じゃないけど、“鍋島”ってことが起こるわけです。

たとえば、じゃあ御用品がどうやって決められるのか考えれば、もっと分かりやすいかもしれませんね。まあ、実際にはこんなに単純じゃないでしょうが、ざっくりとした話ってことで…。ようするに、もちろん本店にもお伺いは立てたでしょうが、支店長の喜左衛門さんが、贈答用として“採用してよろしっ！！”って決裁したものが御用品ってことです。だから、製品の様式は二の次です。別に鍋島様式じゃなくたって、支店長が決裁すれば“鍋島”ってことですから。

ところが、先にお話ししたように、多くの方々は“御用品”＝“鍋島”＝“鍋島様式”ってイメージを持たれているものですから、さらにややこしいことが起こります。「これは鍋島様式だから御用品だ。」みたいな記述を見たりしませんか？でも、これって御用品であることの証明として、鍋島様式であることを根拠にしてるってことですから、実は本末転倒ですよ。鍋島様式だって、ちゃんと支店長が採用の決裁したから、御用品って意味での、“鍋島”になるわけですよ。

いや、別に鍋島様式の製品が、御用品じゃなかったなんて、妄想を言ってるわけじゃないですよ。鍋島様式は、御道具山が伊万里の大川内山に移った後、遅くとも 17 世紀末頃までには御用品の専用様式として採用されてますので、それ以後の製品でしたら、“鍋島”＝“鍋島様式”と捉えても形の上ではほぼ矛盾はありません。でも、少なくとも、鍋島様式が成立当初から御用品の専用様式であったとか、御用品専用様式を目指して開発されたとか、鍋島様式ということで色眼鏡で見たら

ためかもってことです。お疑いならとことん調べてみたらいいですが、そんな証拠はどこにもありませんから。まあ、探せても、だいたい誰々さんがそう言ってるのたぐいでしょうね。

まとめると、現在“鍋島”って言われているものには、製品様式上の“鍋島”と生産制度上の“鍋島”という二つがあるってことですが、長くなりますので、詳しくはまた次回お話しすることにしめます。（村）

有田の陶磁史（364）

前回は、御用品という意味での通称“鍋島”って、実は、別に様式は鍋島じゃなくてもいいんじゃないって話をしました。つまり、御道具山支店の副田喜左衛門支店長が、「これ、献上用！！」って決めたもんが“鍋島”であって、本質的には、“御用品”＝“鍋島”であって、必ずしも“御用品”＝“鍋島”＝“鍋島様式”とは限らないってことです。なので、逆に鍋島様式であることが、必ずしも御用品であることの根拠にはならないってわけです。

前回の最後に、実は“鍋島”には二つの種類があるって話しをしました。つまり、“製品様式上の鍋島”と“生産制度上の鍋島”です。前回の話の内容で、その違いについては多少ご理解いただけたかと思いますが、あらためてお話ししておく、まず、“製品様式上の鍋島”とは、皆さんが鍋島と言ってふつーにイメージするアレです。つまり、鍋島様式の製品のことです。もう一つの“生産制度上の鍋島”とは、御道具山支店の支店長さんが「これ“御用品”ねっ！」って決めたんで、鍋島様式じゃないけど御用品ねってやつです。

この二つは、前回お話ししたとおり、少なくとも17世紀末以降はほぼかぶりますので、“御用品”＝“鍋島”＝“鍋島様式”って関係で、おおむね問題ありません。しかしそれ以前は、“生産制度上の鍋島”、つまり“御用品”＝“鍋島”は成り立っても、“製品様式上の鍋島”、つまり“御用品”＝“鍋島”＝“鍋島様式”って関係が成り立つかどうかは、少なくとも証拠がありません。しかも、仮に“御用品”＝“鍋島”＝“鍋島様式”であったとしても、17世紀末以降のように、ほぼすべてが“御用品”＝“鍋島”＝“鍋島様式”の関係だったとは限らないわけで、“御用品”＝“鍋島”のタイプも存在した可能性は否定

できないわけです。つまり、ハナから「これ鍋島様式だから御用品、これ鍋島様式じゃないから御用品じゃない」みたいな捉え方は止めて、頭柔らかくしてくださいねってことです。

いや～、しつこく何度も同じ説明を繰り返していますが、ココそんくらいめっちゃ重要なんです。大半の方々が、両方の“鍋島”をごちゃ混ぜにした捉え方が、脳ミソの中にこびりついてますから。切り分けてねって言っても、言葉としては理解しても、例のパブロフのオペラント条件付けってやつと同じで…、犬にエサをヤル前にベルを鳴らすことを繰り返すと、そのうちベルを鳴らすだけでヨダレを垂らすようになるってやつ、これと同じで鍋島様式見せるだけで御用品ってなるので、なかなか手強いんですよ。

というわけで、本日はまったく前に進みませんでしたが、次回から岩谷川内御道具山の話に戻りますので、くれぐれも頭グルグルになりますので、二つの“鍋島”を切り分けて考えてくださいねってことで、本日はおしまい。（村）

有田の陶磁史（365）

前回は、“鍋島”には厳密には2つの種類があって、一つが“製品様式上の鍋島”、もう一つが“生産制度上の鍋島”って話をしました。それで、本質的には“御用品”＝“鍋島”が本来の“鍋島”であって、“鍋島”＝“鍋島様式”はどの時期にでも適用できるとは限らず、別途それが“御用品”であることを証明できて、はじめて成り立つものってことでした。つまり、“生産制度上の鍋島”は常に成り立ちますが、“製品様式上の鍋島”は、それが御用品として使われたことの証明があってはじめて“鍋島”と言えるってことです。ねっ、ややこしいでしょ。“鍋島様式”の製品を、ふつうは“鍋島”って省略しますしね。

そんで、そんな話を最初にしつこくやったのには、当然訳があります。岩谷川内御道具山時代に、“製品様式上の鍋島”は存在しないからです。つまり、すべて“生産制度上の鍋島”ってことにな

ります。それじゃ何が“鍋島”なんか分かんないじゃんってところですが、でも、世間ではちゃんとこれがそうよってもんが決められてます。

オタッキーな方なら当然ご存じのことと思いますが、例の皿の裏面に文様のない松ヶ谷手 (<https://www.umakato.jp/kyuto/049.html>) なんて呼ばれているタイプです。こちら (<https://tenpyodo.com/dictionaries/nabeshima/>) のサイトでは、その特徴も記されていますので、これが世の中の一般的な捉え方なんだと思います。その特徴を簡単に示しておくと、素焼きしていること。歪みのない完璧な磁器。裏面に高台銘がない。高台内に目跡がない。畳付を三面削り出して、砂が熔着するのを防ぐ（もっと正確に言えば、畳付の両脇は斜めに削ってないといけないうのですが）、みたいなことが掲げられてます。

な～るほど、素焼きしてるもんや歪みのないもんなんかは別にほかの種類でも珍しくないし、高台3方向削りも祥瑞手には珍しくないですが、高台銘や目跡がないことなんかは、後に開発される鍋島様式の特徴と一致してますね。それに、たしかに猿川窯跡で一番作りが上手なのが、そういうタイプですから、ごもっともかもしれませんね。

ということで、一件落着いて言いたいところですが…、でもね～、残念ながら、これには決定的な穴があるんだな～。分かります…？？せーかいは…！！じゃー誰がこういう特徴を持つものが御用品だったって決めたのかってことです。たとえば、江戸城（汐見多聞櫓台石垣地点）の発掘調査でも、たしかに松ヶ谷手は出てますが、祥瑞手ほかいろんな窯のもんが出土してるんですよ。その中に御用品があるって仮定しても、じゃ、松ヶ谷手だけが御用品って決めたのはなぜってなりませんか？？

つまり、エビデンスがまったくないってことです。ウソだと思ったら調べてみてくださいね。結構これが定着してるみたいなんで、あちこちに活字化されてますから。でも、それが“鍋島”である証拠が示されている記述って500%ありませんから。

ついでに言っとけば、御用品の場合、素焼きも硬く焼かれているっていう話もあります。たしかに、猿川窯跡から、松ヶ谷風の素地で硬く焼締まったもんが数点出土してます。でもね～？？なん

でそれで御用品だから特別な素焼きをしたって話に直結するんですかね～？？硬く素焼きして何か意味あんの…？まるで理解不能…。つーか、その素地って、本当はわざわざ御用品の結び付けなくても、単に失敗品をサヤ鉢の蓋として二次的に転用しているので、硬く焼けてるだけなんですけどね。ましてや、その中の1点は一部に薄瑠璃釉まで掛かってますから、素焼きですらないって落ち…。釉薬掛けるのは、本焼きの時ですからね。

ってことで、本日はここまで。（村）

有田の陶磁史（366）

前回は、岩谷川内御道具山時代の“鍋島”って、まだ“製品様式上の鍋島”は存在しないので、すべて“生産制度上の鍋島”ですって話から、じゃー、それってどういうものってことで、ふつーはいわゆる“松ヶ谷手”なんて呼ばれている裏白の皿なんかがそうだって世間では考えられてるって話をしました。

そんで、まあ、その類って岩谷川内山の猿川窯跡の出土品の中でも最も上質なもんなんで、たぶんそうなんでしょうけど、ところが…、これには一つ大きな落とし穴があって、残念ながら、エビデンスがまったくないんですよってことでした。

不思議ですね…。何の証拠もないのに、孫引きされてくうちに、いつの間にかそれがあたりまえのように定説化してくんですから…。でも、こういうことって、意外に珍しくないんですよ。それに、間々あるのは、次はこれを根拠として、次の説が組み立てられたりもする…。たとえば、この同じ松ヶ谷手でも、高台は三方削りだけど、両側は斜め削りじゃないから、これは御用品じゃないとかね…？だから…、斜め削りのものだけが御用品だなんて、どこをどう見れば分かんのかよ～？？いや、それ以前に、もともと根拠ゼロのもんに、2でも3でもオマケして100でもいいけど、いくらを掛けても、結局0は0なんですけどね。

でも、誰々さんがそう言ってるよって類いの話はあるでしょうけど、残念ながら、これは宗教じゃなくて学問の話なんだな～。信じるだけじゃ、きっと救われないと思いますよ。

ということで、現状で客観的に分かることとしては、まず、岩谷川内山に御道具山があった。たぶん…。そして、そこで作られている製品の中では、松ケ谷手は一番良質なタイプであるみたいなことかな。まあ、このことから察すれば、たしかに松ケ谷手が御用品として使われた可能性は高いかもってことです。ですから、今のところ、たぶんそうかもねくらいに捉えておいた方がよろしいかと…。

それから、くれぐれもお間違えなきようにってことなんですが、仮に松ケ谷手が御用品だったとしても、それが後の鍋島様式のように、それだけが御用品専用様式だったかどうかは分からないってことです。他にも御用品として使用されたものが、なかったとは言えないわけですから。逆に、御道具山の成立当初から、後の時期と同程度に制度が整っていたと考える方がムリかも。制度って、走りながら、現状に即して段々整えられていきますからね。

たとえば、上絵付け工程だって、最初は個々の窯焼きがそれぞれやってたもんが、1650 年代中頃から赤絵屋って専門業者を創設して集住させて赤絵町を造り、少なくとも内山の窯焼きは上絵付け工程ができない制度になったとか、その後 18 世紀になると有田全体でも分業化されちゃいますしね。それで、かつては 17 世紀後半の分業化が内山限定だったって考えられてなかったもんだから、外山の窯場で色絵磁器が出土・採集されるのを解釈できずに、きっと隠れ赤絵屋だったんだってまことしやかに言われてたんですよ。これだって、赤絵町ができたら、当然上絵付けは赤絵町以外ではできないはずって思い込みに過ぎないわけです。

まあ、とりあえず、さすがに御用品まかなうのに松ケ谷手だけじゃムリでしょって理由も多少あるんで、今回はそれについてお話ししてみたいと思います。（村）

前回は、現在いわゆる松ヶ谷手みたいな製品が岩谷川内御道具山製品と考えられているけど、実は、そうなんだって客観的根拠はまったくなくて、いつの間にか世間でそうなるだけって話をしてました。まあ、製品の質から言えば、可能性は高いんですけどね。でも、だからと言って、御用品の生産制度なんてもんは段々整備されていったと考える方が良さげなんで、松ヶ谷手みたいな製品だけが御用品だったって考えるのも、ちょっと走りすぎかもよってことで終わってました。続きです。

ところで、覚えてらっしゃると思いますが、そもそも御用品の生産は高原五郎七（B）さんが、“青磁”なる色絵磁器を開発して藩主の鍋島勝茂さんに献上し、御道具山を名乗ったってところが出発点でした。そんで、五郎七（B）さんが切支丹宗門改で夜逃げしたもんだから、弟子の副田喜左衛門さんと善兵衛さんが谷に投げ捨てられた素地とかを集めて、技術を再興できたので、藩が正式に御道具山支店を開設して、支店長に喜左衛門さん、工場長に善兵衛さんを抜擢したって話でした。

じゃー、この場合、五郎七（B）さんって、御道具山を名乗ったわけですが、現在世の中でイメージされている「御道具山＝藩窯」って方程式でいくと、五郎七さんが登り窯一つ運営していたってことになりますよね。でも、、、ある日よそからぱっときて、ぱっといなくなった人ですよ。御道具山って具体的には猿川窯跡のことでしょうけど、それ以前から窯はあったわけで、ムリヤリぶんどったんでしょうか??まさかね??

どう考えても、せいぜい一窯、つまり焼成室一つ持ってたか、誰かに借りてたってのが妥当な線だと思いませんか??だって、猿川窯跡の出土品って、古九谷様式の製品ばかりってわけじゃなくて、むしろ大半はごく普通の初期伊万里様式の製品ですからね。

そうだとすれば、喜左衛門さんと善兵衛さんは基本的にそれを引き継いだわけですから、正式御道具山の出発点も焼成室一つってことになりますよね。そうすると、だいたい藩の威光で、登り窯を一つ手に入れたんじゃないって大層なご発想をされる方がいらっしゃるんですが、そんなもん完

全なる民業圧迫ですよ。猿川窯跡に関わってた人たちは、明日からおまんま食べれなくなるじゃないですか。ちょうどその頃、窯数が増えたって事実ありませんし。

それに、御道具山設立当初は、まだ大々的に製品配る制度なんてなかったわけですから、そんなにいっぱい焼成室持っても、何にするわけってとこですよ。これまで何度もお話ししてきましたけど、佐賀藩って大貧乏なんですから。そんな、御用品を作ってない人まで雇えないって…。

それから、前にもお話ししたと思いますが、ちょうど御道具山ができて間もない頃の正保4年（1647）に、江戸のお殿様から山林保護のためまた陶工の追放命令が出されて、結局擦った揉んだのあげく、皿屋代官の創設に繋がったってことでした。まだ、お殿様がそんな程度にしか考えてなかった頃に、大々的に藩の窯なんて造れるはずがないでしょ。

ということで、続きの話をしたいのはヤマヤマなんですけど、まだ長くなるので、続きは次回。（村）

有田の陶磁史（368）

前回は、もともと岩谷川内御道具山は、五郎七（B）さんが使ってた窯を引き継いでいるので、たぶん焼成室一つくらいから出発しているはずって話をしました。つまり、世間の皆さまの多くが想像する、御道具山＝一登りではなくって、御道具山＝一窯なんじゃないってことです。だって、まだ例年献上の制度すら整ってないのに、そんなに御道具ばっか焼いてどうすんのよって話。

ところが、慶安4年（1651）には、徳川家光の内覧を経て將軍家例年献上がはじまるわけです。たぶんここから、將軍家だけではなく、袖の下あげとかなくっちゃって幕府の要職だとか、口利きして欲しい面々とか、いろんなところに配るようになるんでしょうね。まあ、タダとは言わないけど、大貧乏な佐賀藩からすれば、自国の産物で賄えるわけですから、それまで長崎などを通じて中国磁器とかいろんな高価な品々を贈答していたことを考えれば安いもんですよ。

ということで、そうすると、逆にちょびっと困った問題があることにお気づきでしょうか…？そうです。当然従来の藩内の御用品なんかとして使っていた時期と比べ、はるかに多くの数を揃える必要が生じるわけです。

でも、工場長の善兵衛さんが管轄していたのは、たぶん岩谷川内山の猿川窯跡の焼成室 1、2 室分とか…、いや少なすぎ？、じゃ、3 室分でもいいですが、ギリギリそんなもんだと思いますよ。これで例年献上はじまったら、完全にアウチでしょ。だって、江戸後期の大川内山の鍋島藩窯で、藩が使っていた焼成室が 2、3 室ですよ。焼成室数はいっしょですが、焼成室の規模が数倍は違いますからね。これじゃ、生産計画が成り立たないでしょうね。

つーか、これだけしつこく言っても、たぶん多くの方々は“藩窯”って言葉が脳裏にこびり付いているので、じゃー藩が一登り全部運営して増産すればいいじゃ～んってなるんじゃないでしょうか？でも、ダメなんだな～これが…。

じゃあ、さっきお話しした大川内山の鍋島藩窯で、何で藩は 2、3 室しか使ってなかったんだと思います？そりゃ、江戸後期のバカでかい窯だと、2、3 室もあれば必要量を焼けたってことはありますよ。でも、そもそも最高級な品々を焼こうと思ったら、最適なのは登り窯のまん中あたりの焼成室で、その上下の焼成室では難があるからですよ。

マグロに例えると、藩は一匹丸々欲しいわけじゃなくて、大トロの部分だけ欲しいわけですよ。でも、大トロだけ海に泳いでるわけじゃないので、どうしても 1 本買わないといけない。でも、売って儲けることが目的じゃないので、必然的に他の部分はムダになっちゃうでしょ。だったら、売るために買う多くの人たちと共同購入するのがベストでしょ。言ってみれば、これが藩窯ってものの仕組みです。

だから、一つの登り窯で生産量を増やそうと思えば、必然的に焼成室規模を大きくするしかないわけです。つまり、逆に焼成室の規模が大きくできないなら、複数の窯を自前で持つか、御道具山以外の複数の窯から調達するしかないってことです。でも、複数の窯を自前で持つってことは、大トロ以外を扱ってくれる人を新たに探さなきゃならないってことです。そうすると、陶工を増やし

て増産しても売れる体制整えなきゃいけないので、まあ、そんなすぐにどうにかできるってことでもないわけです。

つーことで、本日はここまでにしときます。（村）

有田の陶磁史（369）

前回は、登り窯の中で御用品クラスのを焼けるのは、まん中あたりの2、3室程度って話をしました。そんで、例えは何ですが、つまりマグロ1匹の中でも大トロの部分しか必要ないけど、御用品は残念ながら売って儲けるためのもんじゃないので、大トロ以外の部分は使い道がない。でも、そこは大藩ですから、贅沢に1本買いして、大トロ以外は破棄してました…、な～んてことあるわけないでしょ。ましてや、ド貧乏な佐賀藩に限って。じゃーどうするかって言えば、いっしょに1本買ってくれる民間人集めればいいわけですよ。それが“藩窯”なるものの登り窯の所有形態ってわけです。だから、藩が所有権持つのは大トロの部分のみ。ほかは、あくまでも民窯ってこと。つーか、よーは、逆に民窯の一部の所有権を藩が持ってるって意味。これでも“藩窯”って用語は適切??

そんで、御道具山設立当時の、藩内での御用品消費って時代ならそれでも良かったものの、じゃー例年献上のはじまる慶安4年（1651）以降はどうすっぺって話です。だって、一気に必要量が増えるわけでしょ。

でも、その時期、その時期で、登り窯の焼成室なんてもんはおおよそ標準的な大きさってもんがあって、それよりバカでかいもん造ろうにも、その時期なりの築窯技術の限界があるわけですよ。大川内山の江戸後期の鍋島藩窯跡の焼成室がバカでかくできたのは、構築材であるトンバイ（耐火レンガ）を窯全体に使えるようになったためであって、別に鍋島藩窯跡が特別ってわけじゃないで

す。でも、さすがに 17 世紀中頃だと、トンバイは焼成室の奥壁に使う程度なので、そんな大きな窯は造れない。つーわけで、焼成室規模を大きくして生産量を確保するって案はバツです。

そうすると、藩が複数の窯で焼成室を分散して所有するか、不足分を民窯で調達するかってことになりますが、そもそもこの岩谷川内山時代に鍋島様式はまだ確立してないので、御用品専用様式というものは存在しないわけです。だったら、別に御道具山だけで生産しなくても、まわりの窯場からいいやつ調達してくればいいだけでしょ。これこそザ・御用品ってスタイルは、まだないわけですから。OEM ってやつですね。リスク分散、開発コスト削減、ラインナップ充実ってとこかな。やっぱ、自前で複数の窯を持つのはリスクが大きすぎますよ。それに、前回もお話したように、窯を増やせば大トロ以外をさばいてくれる人探しとか、さばける体制も構築しないといけませんしね。それから、一から十まで善兵衛さんここで、開発から試作、生産までやってたら、人もコストもかかりますしね。

そんなことするより、支店長の喜左衛門さん名で、「御用品にすっからこんなん作ってや」って注文すればいいだけです。既製品の中にも使えるのあるかもしれないし。だって、高級品から下級品まで、何でも揃うのが有田ですからね。

これなら、少し前にお話した江戸城の発掘調査で、松ヶ谷手以外にもいろんな窯の製品が出土しているのにも矛盾しませんしね。

いかがでしょうか？今日は何も進みませんでした。だんだん“藩窯”のイメージがグチャグチャになってきたんじゃないでしょうか？でしょうね。じゃー、次回はその辺について整理してみたいと思います。（村）

有田の陶磁史 (370)

前回は、“藩窯”って呼ばれているけど、実際は民窯の中のまん中あたりの焼成室を藩が所有権を持ってるだけで、例年献上がはじまって以降は、“藩窯”なるものでは賄えない部分は、民間委託した可能性が高いんじゃないですかねって話をしました。続きです。

でも、そうすると、ますます“藩窯”って何ってなってしまうますが、しつこいようですが、“藩窯”って用語を使うから、どうしても登り窯のことをイメージしてしまいがちなんですね。でも、そもそも“藩窯”なんて当時使われていた名称じゃなくて、研究の過程で創作された言葉ですからお間違いなきように…。

じゃ～、考えてみてください。

今は、いろんな製品に貼り付けられてるラベルとかに、老眼には絶対見えないくらいのミクロな大きさで、いろんなことが書かれてますよね。その中に、生産者なり販売者なんかも書かれてますが、その所在地って、普通は実際に製品を製造している工場の所在地じゃなくて、管理部門のある場所が書いてあるでしょ。

だったら、佐賀藩御道具山支店の場合は、支店長の喜左衛門さんがいる管理部門が御道具山の所在地であって、善兵衛工場長が仕切る工房や登り窯のあるところじゃないってことになりませんか～？つまり、御道具生産を管理するお役所。

いや、もちろん両方が同じところにあれば問題ないですよ。でも、仮に別々なところにあった場合は、支店長のいる場所が優先されるってことです。つまり、御道具山っていうのは、登り窯のある場所のことじゃなくて、言ってみれば、副田支店長が事務所を構える場所ってことになりませんか。

まだシックリこないという方のために、もうチビッと別の説明をしますね。さっきお話ししたように、もともと“藩窯”という言葉はありません。当初は“御道具山”です。“藩窯”だと登り窯をイメージしてしまいますが、“御道具山”だとどうですか？これだと、“岩谷川内山”、岩谷川内の山、つまり窯業地って言ってるのと同様ですから、御道具山は御用品を生産した場所って意味で、別に登り窯や工房だけを指すわけではないのはお分かりでしょうか。

でも、まだすっきりこない？まあ、お待ちください。重要なのはこの次です。この“御道具山”ですが、実は、その後名称が変わっています。『源姓副田氏系圖』によると、例の五郎七さんの弟子だった初代喜左衛門日清さんを継いだのが清貞さん、その次が清長さんで、その代のことですが、

ここに「延寶年中御道具山大川内へ移居」とあり、「御道具山役相勤」と記します。そんで、この方は延宝6年（1678）に亡くなったことになっています。それを継いだのが喜左衛門政宣さんって方なんですけど、この方の勤め先の名称は「御道具山」ではなく、「大川内御陶器方」に変わっています。なので、素直に考えれば、延宝年間に変化があったってことでしょうね。まあ、年代についてはその内また詳しくお話することもあると思うので、ここでは置いときますが、「大川内御陶器方」って、どう考えてもやきもの工場のことじゃなくて、お役所の名前でしょ。ならば、その前身である御道具山も、やっぱ役所、つまりここで言うところの、喜左衛門支店長のいた佐賀藩御道具山支店のことってことになるでしょ。

と、長々と重箱の隅をつついたのには当然訳があるんですが、長くなるので続きは次回。（村）

有田の陶磁史（371）

前回は、ダラダラと屁理屈こねくり回して申し訳ありませんでしたが、「御道具山」って、実は善兵衛工場長のいる現場の方じゃなくて、本質的には副田喜左衛門支店長がいる佐賀藩御道具山支店の方を指してるんじゃないかって話をしました。つまり、窯場じゃなくしてお役所ってことです。

ところで、前回『源姓副田氏系圖』に記された副田家の役職継承についてちびっと触れましたが、たとえば、例の五郎七（B）さんについては初代喜左衛門日清さんの項に記されているもので、系図ですからまだ続きがあって、天保4年（1833）に大河内御陶器方手伝役を仰せ付けられた孫三郎敷雅さんまで、副田家歴代が記されています。その中で、初代喜左衛門日清さんの記述の続きには、以下のように記されています。

「附承應萬治年中迄御道具山岩谷川内ニアリ」

つまり、承応（1652～55）、万治（1658～61）年間まで御道具山は岩谷川内にあったってことで、ちなみに、承応と万治の間には、明暦（1655～58）が挟まります。前にお話ししたとお

り、御道具山自体は正保4年（1647）までには成立していそうですので、ここでいう承応とは、試運転を終え慶安4年（1651）12月に徳川家光さんが内覧した後、例年献上がはじまった御道具山本格スタートの年だと考えられます。

じゃー、明暦から万治頃って、何があったか覚えてらっしゃいますでしょうか？そうです。内山の窯業の再編に端を発する、有田の窯業の大シャッフルにより、内山、外山という概念ができたり、内山に赤絵町が成立したりした頃です。つまり、この再編に伴い、御道具山も移転したってことです。

問題は岩谷川内山からどこに移転したのってことです。系図によれば、初代喜左衛門日清さんは、承応3年（1654）に亡くなっており、岩谷川内に葬られたことになっています。なので、現在大川内山に「陶工無縁塔」と呼ばれる無縁墓標を880基くらいピラミッド型に積んだ供養塔がありますが、その中に副田家の墓も含まれるんですが、日清さんのものは確認されていません。

それを継いだ喜左衛門清貞さんですが、「御道具山役相勤」の記述の後に、「寛文年中御道具山南川原へ移」となっており、寛文7年（1667）に亡くなって、墓所は南川原にあるけど、大川内山の墓所に石塔があることが記されています。この南川原の墓所は確認されていませんが、大川内山の供養塔では清貞さんの墓標も確認されています。

そして、前回も少しご紹介しましたが、それを継いだ清長さんの項目では、やはり「御道具山役相勤」として、「延寶年中御道具山大川内へ移居屋敷永代御免地二被 仰付」となっており、ここからはずっと大川内山に住むことになったとします。先代の清貞さんは寛文7年に亡くなってますので、清貞さんが南川原山から大川内山に移ってきたことになります。

ゴチャゴチャしてるのでまとめると、系図によれば、まず日清さんが岩谷川内山で御道具山役を務め、その没後は清貞さんが引き継ぎ、その代の途中の寛文年中に御道具山が南川原山に引っ越しになった。そんで、その清貞さんが亡くなったので、清長さんが引き継いで、その代の途中の延宝年中に御道具山が大川内山に移ったってことになります。

さて、本題はここからなんですが、長くなりますので、続きは次回。（村）

有田の陶磁史 (372)

前は、『源姓副田氏系圖』によれば、御道具山は承応（1652～55）から万治（1658～61）の間は岩谷川内山にあり、寛文年間（1661～73）には南川原山に移り、そして延宝年間（1673～81）には大川内山に移転したって書いてあるって話をしました。でも、よく考えれば、さすがにそんなに都合良く年号の節目ごとにぴったり移転したなんて信じられないですよ？

まあ、猿川窯跡も、同じ岩谷川内山で類品を焼いている岩中窯跡も芙蓉手皿とか、ごく少量ですが欧州向けの製品なども出土しますので、1660年代初頭頃までは、窯が続いていた感じです。だったら、普通考えたら、御道具山の南川原山移転は、寛文のはじめ頃って可能性が高いでしょうね。ピッタリ寛文元年ってこともなくはないってこと…。でも、前回お話ししましたが、初代の日清さんを継いだ喜左衛門清貞さんが亡くなったのが寛文7年（1667）で、墓所は南川原にあることになってますので、それ以前であることは間違いないと思います。大川内山に移ったのもぜんぜん分かんないですが、延宝の早い時期である可能性は高そうです。あっ、そう言えば、ちまたでは延宝3年に移ったってまことしやかに記されているものを時々見かけますが、それってたぶん昭和11年（1936）発行の例の中島浩氣『肥前陶磁史考』が元ネタでしょうね。この中島さんが、どっからその年号拾ってきたのかはよく分かんないんですが、少なくとも江戸時代の古文書にそんなこと記しているものないですからね。だから、そう書いてある活字や年表があったら、あっ、こいつちゃんと調べてね～なって思った方がいいかもですよ。

まあ、それはいいとして、というように『源姓副田氏系圖』に基づくこんな感じの流れになるわけで、御道具山移転について記す文献史料はこれしかありませんから、かつては岩谷川内山から南川原山、そして大川内山へって捉え方が一般的でした。ところが今日では、別な捉え方がニョキニョキと頭角を現してきたってか、そうみたいだと思われている方が多いような…？そうです。南川原山を挟まずに、岩谷川内山から直接大川内山移転って捉え方です。

この根拠とされているのは、考古学的な発掘調査の成果です。岩谷川内山で芽吹いた技術が直接継承されているのが、大川内山と考えられるからです。もちろん、別に考古学的成果だからってわけじゃないですが、この技術移転に関しては寸分の異論もございませんよ。祥瑞色の強烈な岩谷川内山の技術は、有田の窯場の中でも相当異色ですから、移転先を推し量ることはそう難しいことじゃありませんから。そんで、その移転先である大川内山の日峯社下窯跡で、いわゆる初期鍋島と言われるものが出土してるってことなんで、じゃー、もう決まりやん…ってとこですかね～。つまり、御道具山は岩谷川内山の猿川窯跡から、大川内山の日峯社下窯跡に移転したって…。今は、これが世間で一番まかり通っている説ですかね～？

でもね～、本当にそうなんでしょうか…？？っていつもながら、素直じゃないですね。でも、つーか、それ証明になってます…？？このブログで、何度も、繰り返し、しつこく、ねちっこく説明してきたのはこの布石ってことでもあるんですが、鍋島様式の製品が出土することと、御道具山がそこにあったこととは、そもそも本来別次元の話だってことはお分かりいただけますでしょうか？だって、鍋島様式ってあくまでも製品のスタイルのことであって、本質的には御道具山の所在とは何にも関係ありまへんがな。たとえ、それが御道具として使われたとしても、別に御道具山自体は別のとこにあってもいいわけでしょ。そう、御道具山支店の喜左衛門支店長のいるとこって意味です。

ということで、岩谷川内山から直で大川内山ってことの証拠とされてるものに、とりあえず疑問を挟んだところで、本日は止めとくことにします。（村）

有田の陶磁史（373）

前回は、御道具山が岩谷川内山から直接大川内山に移ったっていう今はやりの説について、ほんまかいなって疑問を挟んだところで終わってました。たしかに、岩谷川内山から直接大川内山に鍋島様式の元になる技術が移転したのは間違いないと思いますよ。あんなクセの強い技術は有田の

窯場ではほかにはないので、ちょっと別のシナリオを考える方が難しいですから。だったら、日峯社下窯跡で鍋島様式の製品が出土してるわけだし、素直に岩谷川内山から大川内山に御道具山が移転したって考えればいいじゃんってところですが、前回説明したように、ちょっとそういうわけにもね？いや、そうかしんないけど、根拠的にちょっと…？？だって、様式はあくまでも製品自体のスタイル名であって、別に御道具山の所在を証するわけじゃないですから…。

たしかに、どうしても名前に引っ張られがちなんですけどね。ずっと前に、もしかしたらお話ししたことがあるかもしれませんが、そもそも“鍋島”なんて名前が付いたのは大正時代のことで、それが昭和初期頃にかけて普及していくわけですよ。“古九谷”や“柿右衛門”、“古伊万里”なんかといっしょに。そんで、その頃は製品のスタイルの違いを生じる要因は、生産場所差って考えられたわけなんです。なので、石川県の九谷産である古九谷、酒井田家産である柿右衛門、有田民窯の製品である古伊万里とならんで、藩窯製品である鍋島みたいに、生産地名が付けられたわけです。だから、この頃には名称自体に、ちゃんと意味があったわけです。

でも、詳細は省きますが、昭和 30 年代頃に、製品のスタイル差は、実は生産場所の違いじゃなくて、生産時期の違いじゃないって考えられるようになりました。鍋島は除きますけどね。なので、本来はその時に名前を変えておく必要があったわけです。A でも B でも何でも良かったんですよ。生産場所の違いじゃなくなったわけなので。でも、もう名前が世間に深く浸透してたんですね。学問の世界だけ動いても、全体を動かせないのがこの分野ですから。古美術とか商売にも絡んできますし。

そんで、仕方ないので名前はそのままにしておいて、その後ろに単純に「様式」って語をくっつけたわけです。これは生産場所名じゃありませんよ、あくまでも製品のスタイル名ですよって意味で。もちろん鍋島様式も同様です。でも、いくら製品のスタイル名って言われても、名前はそのままなので、どうしても名前に引っ張られるのが人の常。いくら名前に意味はないって言われても、意味を感じてしまうんですね。

つーことで、鍋島様式も同様で、この様式名そのものに本来藩窯製品って意味はないわけですよ。だから、こういう様式のものが、これこれこういうように御用品として使われたって別途証拠がくっついて、はじめて藩窯製品になるわけです。

たとえば、鍋島家に伝来した図案がいくつか残っており、その中には元禄9年（1696）、宝永6年（1709）、正徳3年（1713）、正徳4年（1714）、享保3年（1718）の年号が入っているものがあります。そして、それと同じ鍋島様式の製品が発見されていますので、17世紀末以前には、鍋島様式が御用品として使われたことは確実なわけです。

また、佐賀藩2代藩主光茂さんが、元禄6年（1693）に「有田皿山代官に宛てた手頭写」が残っており、この段階にはすでに「大河内焼物方」となっており、御用品生産が大川内山に移っており、内容からもっぱら大川内山で御用品をまかなってるみたいで、ほかでも生産していたような様子は窥えません。そんで、この頃の窯である鍋島藩窯跡で出土する良質な製品は、ほぼ鍋島様式なので、この頃までには基本的に鍋島様式の製品が御用品の専用様式として使われていたことが分かります。なので、これ以後は基本的に鍋島様式＝御用品と考えても差し支えないわけです。

でも、逆にそれ以前のことは分からないってことですから、鍋島様式の製品だからってことで、それが御用品であった証明にはならないですし、たしかに質から見れば、間違いなく御用品として使われたらと思うんですが、少なくとも、鍋島様式の製品だけが、御用品の専用様式であったとは言えないってことです。

ってことで、まだ長くなりそうですので、本日はこのへんまでにしときます。（村）

有田の陶磁史（374）

前回は、佐賀藩2代藩主光茂さんが、元禄6年（1693）に「有田皿山代官に宛てた手頭写」なんかによって、それまでには鍋島様式の製品が御用品の専用様式になってたみたいですねって話をしました。だから、それ以後は、鍋島様式の製品であることを根拠に御用品って考えても、本当は

そう考えちゃいけないんですが、事実上特に差し支えはありません。問題は、証拠のないそれ以前の時期で、専用様式がどこまで遡れるかということです。

岩谷川内山から移った御道具山に関する説は、前からお話ししてますが2つです。一つはオールドな説で、『源姓副田氏系圖』にあるように、南川原山を経由して大川内山へと至るケース。もう一つが、今はやりのフレッシュな岩谷川内山から直で大川内山へ移転したって捉え方です。

岩谷川内山から大川内山に直接という説は、平成元年（1989）12月から翌1月に、大川内山の日峯社下窯跡の発掘調査が行われ、鍋島様式の製品が出土してから唱えられるようになった説です。じゃー、30年以上も経ってるからそんなにフレッシュでもないじゃ〜んって言われそうですが、ただ、その後超低空飛行が続いて、世間への認知もからっきしってとこだったんですよ。ところが、再び2次調査が平成12年（2000）に行われ、その後も次々と令和元年度の12次調査まで実施されたことにより、少しずつ鍋島様式の陶片も蓄積が増えてきたもんだから、盛り上がりを見せるようになったってことです。最初は、日峯社下窯跡なんて知ってる人すら、あまりいなかったんですけどね。今ではすっかり何の疑いもなく藩窯扱いだかちょっと驚き…。

まあ、岩谷川内山の猿川窯跡と大川内山の日峯社下窯跡の技術に類似性が見られるってことは、証拠としては客観性が高そうなので、一見スキのないようには思えるかもですね？ただ、よくよく考えてみてください。技術の繋がりと御道具山の移転って、本来は直接は関係ないでしょってことがミソかな〜。だって、本当に初代副田喜左衛門日清さんを継いだ、肝心の喜左衛門清貞御道具山支店長さんも大川内山に移ったって証拠ってあんのってことですから。それに、しつこく言ってるように、この時期だと鍋島様式の製品が出土しているってことを根拠に、日峯社下窯跡が藩窯って捉え方をしちゃいけないんだってば〜。

ご存じの方もご存じでない方もいらっしゃると思いますが、大川内山の場合、窯場としての興りは唐津焼を焼いた江戸初期のことです。でも、一旦窯業地としては途絶えて、再び復活するのが日峯社下窯跡などってことです。その成立時期は、1650年代後半頃と考えていますが、大川内山直

説では、だんだん年代が遡ってきており、最初は 1660～80 年代ってことになってましたが、だんだん後ろが削られて 1660～70 年代になり、今では 1660 年前後になってるみたいですね。

つーか、しばらくは日峯社下窯跡で鍋島様式の製品が出土しても、すぐには南川原山をポイできなかったんですよ。だから、『源姓副田氏系圖』にのっとして延宝（1673～1681）年中に御道具山が大川内山に移ったのかもってことで、下限が 1680 年代なり 70 年代なりってことになってたってカラクリ。でも、調査するたびに少しずつ鍋島様式の陶片が増えるもんだから、自信を持って後ろが削られていったってことです。まあ、本当は出土品の数は関係ないと思いますけどね…？しかも、調査の途中から、どのあたりの焼成室の近くで出土するかが分かってきましたからね。効率よくなってきたんですよ。

なお、前に猿川窯跡の廃窯は 1660 年代初頭頃って言いましたが、じゃー、日峯社下窯跡が 1650 年代後半では合わないじゃないってことになりますが、たぶん岩谷川内の人たちが丸ごと移ってきたわけじゃないですからね。少なくとも、御道具との関係が問題になるようないいやつじゃなくて、その他大勢を占める網目文の碗だとかの下級品には岩谷川内色はまるでありませんから。

いや～、もう少し大川内山の窯場の話をしようと思ってましたが、まだ続きそうですので、本日はここまでにしときますね。（村）

有田の陶磁史（375）

前回は、主に御道具山の岩谷川内山から大川内山への直接移転と、日峯社下窯跡の話をしてました。この説もパッと出てパッと花開いたわけじゃなくて、結構長い潜伏期間を経て、再発掘に伴い急に盛り上がって、いつの間にか知らない間（？）に、下限が 1680 年代から 1660 年前後日峯社下窯跡藩窯説になってきたってことでした。続きです。

これって、前にもお話ししたような気がするんですが、実は大川内山には、日峯社下窯跡とほぼ同時に開窯したことが判明している窯がほかにもあります。御経石窯跡や清源下窯跡なんかです。

焼いてるものの主体は、多少窯差はありますが、まあ、日峯社下窯跡と似たり寄ったりです。粗雑な網目文碗とかですね。ただ、違っているのは日峯社下窯跡以外では、鍋島様式の製品が出土していないことです。

じゃー、やっぱ日峯社下窯跡が御道具山？ってことにすぐになりそうですが、その日峯社下窯跡の鍋島様式や松ヶ谷手風の製品と同レベルの質を持つものは出土してます。数はわずかですけどね。でも、日峯社下窯跡も、お話ししたように、1次調査の時には微々たるもんだったんですよ。でも、その後12次調査までやってますから、そりゃ増えますわ。御経石窯跡はほぼ物原調査してませんし、清源下窯跡もチビッとですから。

そんです。事実としてあるのは、これら3窯跡でほぼ同質のものが出土してるけど、しかし、鍋島様式の製品は日峯社下窯跡でしか出土していないってことですよね。ただ、御経石窯跡の白磁皿や、清源下窯跡の青磁皿も高台高いですよ。清源下窯跡の青磁皿の陽刻文なんて、まさに岩谷川内山臭さプンプンですし…。まあ、もし日峯社下窯跡から出土していれば、鍋島様式の青磁ってことになってたでしょうね。

そんで、も一つ事実としては、岩谷川内山では鍋島様式の製品は出土していないってことです。じゃー、何で大川内山では、いきなり鍋島様式の製品が御用品ってことになるの？誰が決めたんですかね～ってことです。少なくともお隣の窯場に同質の製品があるなら、そっちも御用品として使われたのでは？という発想にはならないんでしょうか？？

ただ、そうなら、日峯社下窯跡だけが御道具山ってことにはならないから、都合が悪いかな？？少なくとも、現在一般的な藩窯って用語を使うとすれば、藩窯が3つ以上あったってことになって何だか違和感プンプンですよ。

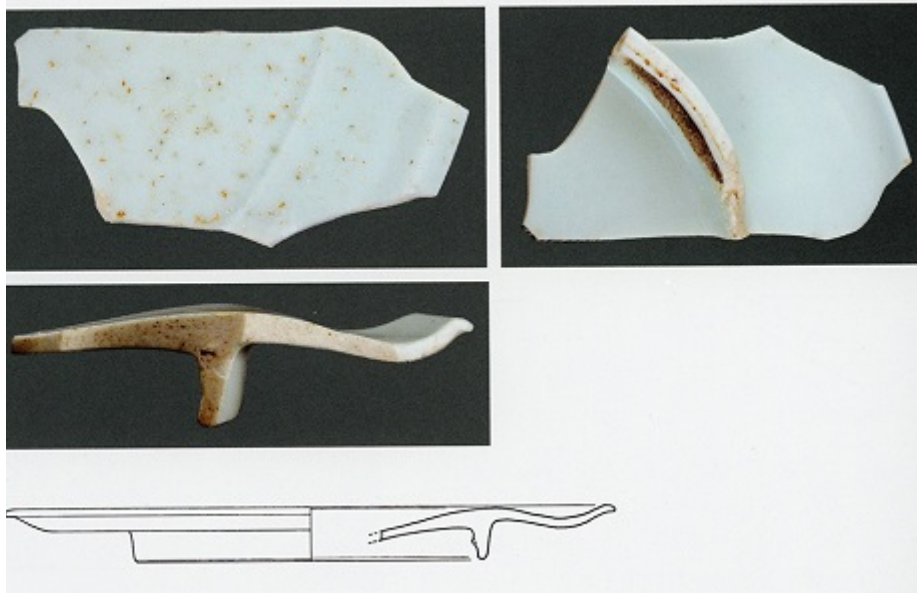
つーことで、長くなるので、本日はこの辺までにしとこうかな。（村）

資料54〔物原周辺 表採〕



御経石窯跡

資料53〔物原周辺 表採〕



御経石窯跡

資料56〔Dトレンチ 攪乱層出土〕



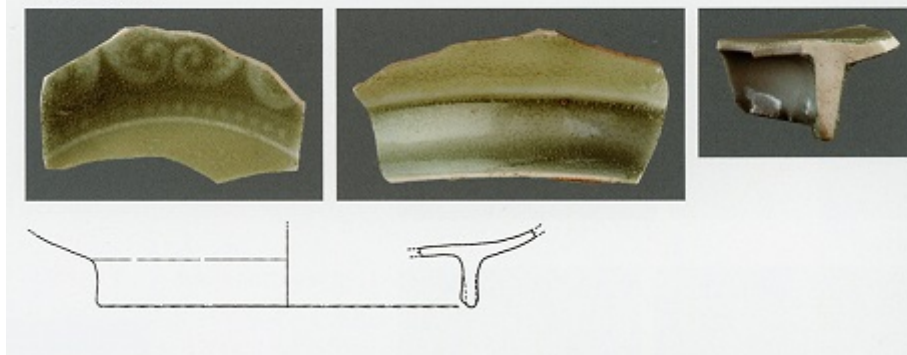
京下窯跡

資料55〔Dトレンチ1 II層出土〕



下窯跡

資料57〔表採〕



下窯跡

船井向洋「大川内山所在の窯跡発掘調査報告」関和夫編『改訂版初期鍋島』創樹社美術出版 2010 より転載

有田の陶磁史 (376)

前回は、実は大川内山には日峯社下窯跡とほぼ同じ頃に開窯した窯場がほかにも2つ以上あって、鍋島様式（日峯社下窯跡で出土してれば、鍋島様式と言うのかもしれませんが？）の製品は出土していないけど、ほぼ同質の高台の高い白磁や青磁の皿なんかも出土してまっせ。じゃー、どういう理由でそっちは御用品じゃなくて、日峯社下窯跡の鍋島様式の製品が御用品っ

て決められるんですかね～って話をしてました。だって、岩谷川内山時代には鍋島様式はないわけですから。まさか鍋島様式の製品に、御用品って書いてあるわけでもないですしね。でも、それなら、そういう御経石窯跡や清源下窯跡の製品も御用品だとすれば、藩窯が3つ以上あったことになって、それも変ってところで終わってました。続きです。

という感じで、岩谷川内山から直接大川内山説について見てきましたが、何度も記しましたが、実際には御道具山というのは副田支店長のいた御道具山支店の所在地の方であって、生産現場の方じゃないんじゃないですかってことです。たとえば、そう考えれば、別に御用品を生産した窯はいくつあっても構わないわけでしょ。

ところで、『酒井田柿右衛門家文書』には、次のような「申上口上」という文書があります。

「一、親柿右衛門儀南川原へ罷在、御用物之儀者不申及、方々御大名方御詔物相調罷居候。

（後略）」

親柿右衛門とは、初代柿右衛門である喜三右衛門さんのことで、これは次男の三代柿右衛門さんの文書だと考えられています。ちなみに、長男である二代は初代より早く、寛文元年（1661）に亡くなったといえます。

むかしむかしお話ししましたが、喜三右衛門さんは、もともと年木山の楠木谷窯跡に関わっていて、例の内山の再編の際、1650年代後半頃に南川原山に移ったと考えられます。だから、この文書はその南川原に移住後の話です。

前にお話ししましたが、岩谷川内山の御道具山は遅くとも正保4年（1647）以前には成立していて、慶安5年（1652）からは將軍家例年献上で本格稼働しているわけです。

ところが、この文書によれば、まさにその御道具山が稼働していたはずの時期に、「御用物之儀者不申及」、つまり、これは藩の御用品ってことでしょうけど、少なくとも喜三右衛門さ

んも、藩からの注文品の調達に関わっていたってことになります。そうすると、何でもかんでも御道具山で生産していたわけじゃなくて、御用品を民間からも調達していたことになりませんかね…？じゃー、話が戻りますが、当時同じ最高級品を生産した山として、大川内山にも調達先が複数あっても別に問題ないと思いませんか？

ということで、関連してもう少しこのあたりの年代について整理しておこうかと思うんですが、長くなりそうなので、本日はここまでにしときます。（村）

有田の陶磁史（377）

前回は、『酒井田柿右衛門家文書』、三代柿右衛門さんの「申上口上」の記述から、喜三右衛門さんところにも御用品を注文したくらいなので、別に大川内山でも日峯社下窯跡に限らず、御経石窯跡や清源下窯跡の業者にも注文してても良くないですかって話をしていました。ただ、このあたりは年代がややこしいので、本日は少し整理しておくことにしますね。

先ほど触れた『酒井田柿右衛門家文書』の「申上口上」には、引き続き次のように記述されています。

「一、親柿右衛門隠家仕、某二家を渡申候時節、世上焼物大分之大なぐれ二而、大分之雑佐を仕込申候。上手之物皆悉捨二罷成、しばらく家職を相止罷有候。然処二今程焼物直段能罷成、（後略）」

喜三右衛門さんから三代目に家職が譲られた頃、世間ではやきものが大暴落して、いっぱい在庫を抱えてしまった。そんでしゃーないので、上手の物は全部破棄するはめになって、しばらくやきものの作りを止めたんだそうです。

天下の酒井田家なので、ずっと順風満帆に来てるようなイメージがあるでしょ？でも、世の中そう甘くはないようで…。たしか、記録が残るだけでももう一回は止めてたりしてますし、度々不況にも見舞われてたみたいで。有田では、「窯焼きは三代続かない」って言われてきたくらいですから、そういうことも珍しくなかったんじゃないですかね。そりゃ、当時は月一程度しか焼かないので、登り窯の不窯（焼成失敗）が続けばやばいですし、今でも同じですが、同業者が集まってるころ、まあ一本脚打法みたいなところなので、不況になると全体が落ち込むわけです。もっとも、南川原山だけ不況みたいなこともあるんですよ。だって、高級品ばっか作ってるもんだから、有田の他の地域と比べても量産化技術では劣ってるんです。だから、価格競争を強いられるようなプレッシャーには弱いわけです。まあ、三代さんの時もきっとそうだったんでしょうね。だけど、結局、今はやきものの値段も良くなってきたっておっしゃってます。

前回お話ししましたが、二代目が亡くなったのが寛文元年（1661）ですから、三代目に家職を譲ったのはその直後くらいの可能性が高いんじゃないですかね。そうすると、初代の南川原山移住は1650年代後半のことですから、寛文元年に亡くなった二代目が家職を継いでいた時期があったとすれば、前回の文書にある喜三右衛門さんが御用品の注文を受けていたとする時期は、だいたい1650年代後半頃のことになります。まあ、二代目も注文を受けてたとすれば、60年代初頭頃までってことです。

それで、この初代の喜三右衛門さんが亡くなったのは寛文6年（1666）ですから、初代が隠居中で三代柿右衛門さんが家職を継いでいた頃となると、だいたい1660年代前半頃のことになります。つまり、この頃にやきものが大暴落していたってことです。

じゃー、この頃に何があったかと言えば、思い当たるのは、1650年代中頃から内山の効率的大量生産確立のための窯業の大再編がはじまり、この体制整備がほぼ完成しつつあった時期である1659年からは、オランダ東インド会社による大量輸出がはじまったということです。

この改革によって、山ごとの製品ランク別生産体制が確立し、南川原山がサイターの山からサイコーの山に激変するわけですが、南川原山自体にも結構窯場ができて、下南川原山に従来からあつ

た南川原窯ノ辻窯跡に加え、柿右衛門窯跡や平床窯跡などが設けられ、上南川良山に樋口窯跡などがありました。まあ、最初は本当にクソ良質な製品ばっか作ったのは柿右衛門窯跡だけなんです
が、ほかの窯場も内山レベル以上は維持されてました。

それに加えて、内山もなかなかのもんが作れたんです。以前古九谷様式のところで話したと思いますが、17世紀後半の有田の主たる後継技術になったのは、喜三右衛門さんが開発した「赤絵」
(染付製品なども含めた技術の総称です)の技術ですから。特に内山の技術は南川原山とは兄弟みたいなもんですからね。

つーことで、もう少し話しが続きそうなので、また次回ってことで…。(村)

有田の陶磁史 (378)

前回は、初代柿右衛門さんが隠居して、三代柿右衛門さんに家職が譲られた頃、世間ではやきものが大暴落して、いっぱい在庫を抱えてしまったもんだから、しゃーないので、上手の物は全部破棄して、しばらくやきもの作りを止めたんだそうですよって話をしました。そんで、天下の酒井田家と言えども、なかなか順調な時ばっかじゃなかったみたいですよってことでした。そう言えば、この順調な時ばっかじゃなかったって説明が、ちょっと言葉足らずだったような…？本来の話題である御用品生産制度にもメチャクチャ関わることだし、高級品生産ってのがどういうものか分かりますので、もう少し例を話しておくことにしますね。

少し時代は飛んで、六代柿右衛門さん(1690~1735)時代の享保8年(1723)のことです。佐賀藩に提出した「口上続覚」という文書なんですが、この中におもしろいこと…、いや、酒井田さんちにとってはとっても不幸なことなんで不謹慎ですけど、内容は南川原の窯業のはじまりから、例の高原五郎七さんの話、赤絵はじまりの話なんかが、一、一、一、みたいな感じで続いて、最後に次のような一文があります。活字として原文が掲載されることはあまりないので、ちょっと長いですが、引用しときます。

「一、右之通代々相相続仕来候処、近年御道具御注文等も仰下げ無之年に増し相衰え、不及某儀は申に絵書細工人荒使子躰之者迄職業無之日に増し難渋相重年老之者共空敷相休童子よりは其職仕習不而は不相叶候処、右之職退転仕候場に而壮年之者共に而は上品之仕習罷在候故、脇山罷出候而も懇望に預り候得共、風雨之折は遠方他出不相叶空敷相休候儀間々有之、日数相続不申、然処米穀高値に付而は毎日相忝（かせぎ）候而も日用暮兼難渋相重り候故、己前之通用之筋被仰付下度伏而奉願上候事。御神祖様已来是迄相伝職業退転仕候儀如何に茂無是悲参掛り歎け敷次第奉存候。以上。

享保八年」

というものです。

藩へのお願い文なんで、この記録のミソはこの引用した最後の一、の部分で、これが言いたいがために、この文章の前に、例によって、うちの先祖こんなに凄いんだからってことがズラズラと書かれているわけです。

何が書いてあるかと言え、何となく文字づらからも雰囲気は伝わってくると思いますが、きっと読むのメンドクサイと思いますので、全文訳すと長くなりますので要点だけ記しとくことにします。この前の文章で、以前は御道具の注文を受けて、柿右衛門焼として江戸や上方は言うまでもなく、大明（中国）まで賞美されて、代々相続してきたみたいなのが記されます。

ところが、近ごろは御道具とかの注文もないので年々零落して、自分はもちろん絵書き、細工人、荒使子（あらしこ：雑役夫）などまで仕事がなく、難渋しているんだそうです。そのため年寄りには休まざる得ないし、子どもは技を習得できないのでやっぱ仕事を休むし、壮年の人たちは上級品の作り方を身に付けているため、雑器生産の脇山で作るように懇願されても、風雨の際は遠方に行くこともできず、往々にして休むことがあって、日数が稼げません。米価が高騰して毎日稼いだとしても、日常生活がままならなくなってますから、前のおり御用品を仰せ付けてね。お願

い！！ってな具合です。ちなみに御神祖様というのは、藩祖の鍋島直茂のことで、それ以来伝え続けてきたのにつて嘆いてらっしゃいます。

ねっ、柿右衛門さん喘いでいるでしょ。まあ、それはいいとして、重要なのは、酒井田家の経営体質です。『酒井田柿右衛門家文書』には注文帳も残っており、詳しくは別途お話しする機会があると思いますが、佐賀藩に限らず各地の大名関係からも御用品の注文を受けています。つまり、酒井田家が御用品を生産したかどうか以前に、代々御用品の注文を受けないと経営が成り立っていない体質となっていたってことです。だから、時々御用品の注文がない時期に当たると、アップアップになるわけです。享保8年頃と言え、大川内山の制度も整ってバリバリ生産している頃ですから、わざわざ酒井田家に注文する必要もなかったのかもしれませんが。なので、この文書のように他の窯場への注文がお休みの時期はあるにしても、もちろん鍋島様式は大川内山の専売特許であることは間違いないですけど、やっぱ御用品という大きな括りでは、すべて大川内山ってのは成り立ちませんねってことです。以上。（村）

有田の陶磁史 (379)

前は、ちょっと寄り道して、酒井田家の悲劇についてお話ししてました。たぶん、皆さん思ってた以上に、御用品漬けにされてて、いざ注文が途絶えると、突然家が傾くほどの経営体質になってたってことです。まあ、そんなくらいですから、藩が直接生産を主導する窯場に限らず、御用品は調達されていたってことです。つまり、以前の話に戻りますが、藩窯というのは窯場のことじゃなくて、御用品調達組織、副田支店長がいる御道具山支店と捉える方が妥当じゃないかと思えるわけです。

続きですが、もう少し酒井田さんちの話をさせてください。以前お話ししていた続きですが、初代柿右衛門さんが隠居して、三代柿右衛門さんに家職が譲られた頃、世間ではやきものが大暴落して、いっぱい在庫を抱えてしまったもんだから、しゃーないので、上手の物なのに全部破棄し

て、しばらくやきもの作りを止めたんだそうですよって話をしました。それで、その時期がだいたい1660年代前半頃で、この頃何があったかと言えば、有田の窯業の大再編が行われて、1659年には、オランダ東インド会社による大量輸出がはじまったってことでした。

それで、『酒井田柿右衛門家文書』「申上口上」の前に引用した部分、例の「御用之儀者不申及」ってやつですが、省略したその続きは以下のようになっています。

「然者、赤絵者之儀、釜焼其外之者共、世上くわつと仕候得共、某手前二而出来立申色絵二無御座、志ゝ物之儀者、某手本二而仕候事。」

ということで、この後に前々回引用したやきもの大暴落の部分が続くわけですが、これによると、喜三右衛門さんが開発した赤絵を窯焼きとかその他の人がドバドバってやり出したみたいですね。でも、それって、自分が作った色絵じゃなくて、世上にあるもんなんかは、自分のもんを手本にしてそういうやからが作ったもんでっせっておっしゃってます。

これは、大昔にお話ししたはずですが、喜三右衛門さんが1647年頃に赤絵の開発に成功して、1650年代前半にかけて古九谷様式が有田じゅうに普及した事実と合致します。それで、50年代後半には、内山で上絵付け工程が分業化されて、生産はよりシステムチックになって、効率的に大量生産できるようになったわけです。

まだこの時期には柿右衛門様式は完成してませんので、生産品の様式的には南川原山も内山も変わりません。違いは質差くらいです。それから、前々回ちょびつと触れましたが、この時期には南川原山にも結構窯場があって、柿右衛門さんちの使っていた柿右衛門窯跡よりちびつと質的に劣るかな〜って製品が作られてました。まあ、レベル的には平均的に内山と同じか、柿右衛門窯跡と内山の間ってくらいかな。

そうすると、バリバリ最高級品を作っていた柿右衛門さんちは、そりゃ困るでしょうよ。違いは多少の質差くらいなんですから。でも、今のブランド品でもいっしょですが、この多少の質差を生

み出す部分に、相対的にたくさんのコストがかかるわけですよ。でも、よほどの目利きならともかく、同じようなもんをわざわざ高い値段出して買います？しかも、その似たようなもんは、効率的に大量生産されてるわけですから、現代の米騒動とは逆に、モノがだぶつけば値崩れも起こすってもんです。

でもね～。柿右衛門さんちょっとお休みってサラッて言ってますが、そう簡単には止められのが当時の窯業なんですよ。だって、共同窯である登り窯使ってるわけですからね。しかも、一番いいもん作ってたわけなので、たぶん結構良さげな焼成室を押さえてたはずですしね。

ってことで、中途半端ですが、まだ話は続きますので次回ということで。（村）

有田の陶磁史 (380)

今回は、喜三右衛門さんが開発した「赤絵」なるものを、1650 年代前半頃までに有田じゅうの窯焼きほかの人たちがくわっと仕ったけど、それってうちで作ったもんじゃありませんでっておっしゃってました。それで、1650 年代後半になると有田の窯業の大再編によって、酒井田さんちも南川原山に移ったわけですが、59 年からはオランダ東インド会社による大量輸出がはじまったって話をしました。そうすると、少なくとも南川原山の柿右衛門窯跡以外の窯場や内山なんかは、様式差はなく質的にも大差ないもんだから、柿右衛門さんち大ピンチになって、とうとうしばらくやきものやめたってことでした。でも、当時は本焼きには登り窯を使ってるので、そう簡単にやめたっていかないんですよってところで終わってました。

ちなみに、喜三右衛門さんが開発したのは「赤絵」って呼ばれてますが、もう一度確認しておきますが、何も色絵磁器ばっかじゃないですからね。そもそも製品の質やスタイル自体から変わるわけなので、染付製品ほかも含めての話です。つまり、ドンピシャ技術の確立期と同時期の景德鎮磁器の類品である、「赤絵」という種類の製品を作る技術ってことです。

ってことで、話を元に戻しますが、登り窯使ってるって止めるって何が困るかと言えば、地区の共同窯ですからね。たとえば、時期はぐっと下がりますが、文政 12 年（1829）の『酒井田柿右衛門家文書』によると、柿右衛門さんちは下南川原山登に焼成室を 2 室持ってらっしゃいます。当時の下南川原山の窯と言えば、南川原窯ノ辻窯跡のことですが…。そうすると、空の部屋のままでは焼けないのが登り窯ですから。いや、焼いてもいいですが、その空の部屋も焚かないと熱や炎が上の部屋に登ってかないですけど、空のまま焚いても一銭にもなりませんから、そんなことする人いないでしょ。そもそもそんなことができる余裕があれば、休止する必要もないわけですし。だけど、きっと柿右衛門さんは完全に廃業するつもりはないでしょうから、第三者に譲り渡すわけにもいかず…。

それに、そもそも許可証である「釜焼名代札」持ってる人じゃないと窯焼きはできないわけですし、もちろん札の貸し借りは禁止されてますので、そうそう譲り渡すところありません。

じゃー、どうしたらいいでしょうね？ってことなわけですが、誰か譲れる人がいるとすれば、アレかな～？って妄想を披露したいのはヤマヤマなんですが、長くなりそうなので、本日はもったいぶったところで終わり。（村）

有田の陶磁史（381）

今回は、寛文時代（1661～73）の前半頃に、高級品市場が値崩れを起こして、柿右衛門さんちは窯焼き止めてましたって話をしました。そんで、でも登り窯使ってる関係上、そんなに簡単には譲れる人がいないので困ったもんだって話をしました。でも、その後だいぶ景気よくなってきたんでもう一回やりたいな～、御道具注文してちょうだいて話でした。続きです。

毎度、小難しい柿右衛門さんちの文書ばかり引っ張り出してきて恐縮なんですが、本日も一つ。「覚」って題されている文書の一つです。

一、本釜 壺間

一、唐臼小屋 壺ツ

願之通被仰付被下候様二筋ゝ宜被仰上可被下儀、偏二奉願候。以上。

一、御道具屋 壺ツ

一、唐臼 式丁

一、大車 式丁

一、赤絵釜 壺ツ

一、米 五俵

一、銀 貳百目

右之通、今度公儀御焼物方二付而、出来立候内、如書載被下由申来リ候条、可被得其意候。已上。

大統覚左衛門

十一月廿九日

山田善五衛門

酒井田柿右衛門殿

この中で、「本釜 壺間」というのは、ご承知のとおり、登り窯の一室ってことです。それと、「唐臼」とは、ご存じかと思いますが、陶石を粉碎するために川の中に設置された施設のことで、これを下げ渡してねって頼んだところ、もっと奮発して藩から下げ渡しがあったって話です。

つーか、正確に言えば、この中でちょっとだけ文献史学の方の間でも意見が分かれていることがあって、それは「公儀」という単語をどう解釈するかってことです。これって、柿右衛門さんちに登り窯の一室や唐臼小屋みたいに不動産ほかを譲るって話ですから、柿右衛門さんちとあんまり離れたところを譲られてもかえって迷惑ですよ。普通考えたら、柿右衛門さんちのある南川原山の施設のお話して考えるのがふつーでしょ。

その場合、何で柿右衛門さんちに譲るのかって理由ですが、「公儀御焼物方二付而」って書いてありますが、この「公儀」というのが、佐賀藩のことなのか幕府のことなのかによって、ちびっと解釈が異なってきます。

他家の例でも両方あって、「大公儀」つまり幕府と、「公儀」つまり藩と分けてるところと、「大公儀」は使っていないところがあると言います。「大公儀」を使わない場合は、通例では、「公儀」は幕府のことを指すことが多いんだそうで、佐賀藩では、少なくとも現在残る文献上では使い分けはしてないそうです。ということは、通例に従えば、柿右衛門さんちは幕府の焼物方を務めていたってことになって、もちろん藩を通じてでしょうが、幕府の御用品を生産していたことになりますよね。

もっとも、仮に公儀が藩のことであっても、藩の御用品を焼いていたことになりますから、御用品の生産に関わっていたことには変わらないんですけどね。

それはそうとして、この文書にはもう一つ注目しないといけないことがあるんですが…、もうお気づきの方もいらっしゃると思いますが、長くなるので、また次回ということで…。(村)

有田の陶磁史 (382)

前回は、柿右衛門さんちの「覚」って文書、つっても「覚」っていっぱいあるんですけど、そのうちの一つをご紹介します。重要な家なので、いっぱい忘備録として残しておかないといけないことがあるんでしょうね。記録しておくほど、大層な生活してないもんには縁がないですね。

内容としては、柿右衛門さんが、

一、本釜 壺間

一、唐臼小屋 壺ツ

を払い下げしてくださいなっようお願いしたところ…、藩からは、どうやら登り窯はくれなかったみたいですけど、

一、御道具屋 壺ツ

一、唐臼 貳丁

一、大車 貳丁

一、赤絵釜 壺ツ

一、米 五俵

一、銀 貳百目

そのかわりに、こんなにいっぱいオマケを付けてくれたみたいですね。それは、「公儀」の焼物方を務めたかららしいです。この「公儀」も、前回お話ししたように、幕府とするか藩とするかって見解の相違があるみたいですが、まあ、とりあえず、幕府なり藩なりの焼物方、つまり御用品生産に関わっていたことは間違いありません。

それで、重要なのはここからです。柿右衛門さんが払い下げを願ったものや実際に藩がくれたものには、動産と不動産があります。動産としては米や銀があって、これはまあどうでもいいです。問題は不動産の方です。

この「覚」には年号が記されていないんですが、登り窯の焼成室や唐臼をちょうだいねってお願いしているくらいですから、その頃、たぶん柿右衛門さんちはそれを持ってなかった時期で、一番合理性がありそうなのは、稼業を止めてた時期で、またやりたくなったのでくださいなっってお願いしたってことじゃないですかね？そうすると、以前紹介した文書にある高級品全然売れなくなっって止めたけど、また景気よくなってきたんでまたやりたいねってことで、また御用品注文してくださいなっって願い出ている三代柿右衛門さんの 1660 年代頃かそれに続く時期の可能性が高いように思えます。

実際に、この頃のことと考えれば、合理的な解釈ができるんだな～。だって、払い下げしてねってことは、藩がその頃そうした不動産を実際に保有してたってことでしょ。しかも、とりあえずいらなくなったので、払い下げてもいいかってなるわけでしょうから。

それで、藩がそんな不動産持ってる可能性のある場所としては、今風の説では、岩谷川内山か大川内山の藩窯ってことになるけど、南川原山の柿右衛門さんが岩谷川内山の施設もらっても、あま

りに非効率で維持するのが大変。ましてや、大川内山なんて論外。今でも自動車でも 30 分近くかかるのに、毎日テクテク歩いてそんなとこまで、わざわざ通えるはずがないです。

ということで、やっと大昔の本题に戻ることができるんですが、やっぱ、柿右衛門さんが貰ったのは、南川原山の施設以外ちょっと考えにくいですね。そうすると、藩は南川原山に窯業関係の不動産を所持してたってことになります。これって、御道具山が岩谷川内山から直接大川内山じゃなくて、やっぱ必然的に岩谷川内山から南川原山、そして大川内山に移ったことになりませんか。時期的にも、南川原山に御道具山があったとするのは、寛文年中って言いますから、だいたい 1660 年代のことです。ね。

と、ここまでお話しして、また次回もう少し詳しく検証してみることにします。（村）

有田の陶磁史 (383)

前は、柿右衛門さんちが登り窯の焼成室や唐臼小屋の払い下げを藩に願い出て、焼成室はなぜかくなかったけど、道具小屋とか赤絵窯とか、唐臼小屋とかロクロとか、その上銀や米までけっこうオマケ付けてくれたって話をしました。そんで、その「覚」の文書には年号が入ってないんだけど、どう考えても合理的な解釈が成り立ちそうなのは、柿右衛門さんちが不況でやきもの止めてたけど、三代目がもう一回やりたいな〜って思った時期に近い頃かって話でした。

ただし、本当に三代の頃かどうかは分かりません。何しろ年号ないんですから。それに、三代柿右衛門さんはもう一回御道具注文してちょうよってお願いはしてますが、それが実現したって記録はないんですから。もしかしたら、四代目になって実現したかもしれませんね。そこらへんは、ちびつと詳しく説明しないと、ちょっと年代が込み入ってるんですよ。

というのは、前にもお話ししましたが、二代目柿右衛門さんが亡くなったのが寛文元年（1661）ですから、これ以前に三代目が稼業を継いでいた可能性はあまりありません。当時は、基本長子相伝ですからね。そんで、初代が隠居して三代目に譲ったって話になってましたが、この

初代が亡くなったのが、寛文6年（1666）ですから、必然的に稼業を譲られたのは寛文元年から6年の間ってことになります。そんで、その頃は柿右衛門さんちは大不況に陥ってしまって、やきものを止めることになってしまったわけですね。

でも、だんだん景気よくなってきたんで、もう一度やりたいな～ってことになって、だから御道具をまた注文してねって藩に願い出ているわけですが、藩からの返事が残ってないのか色よい返事がもらえなかったのか分かりませんが、でも、藩から色よい返事がくれば、「覚」連発の柿右衛門さんちのことですから、ちゃ～んと「覚」を残しとくんじゃないですかね。

まあ、とりあえず、時期的には景気がよくなったのは、初代が亡くなって後のことでしょうか、1660年代でも後半のことのはずです。ところが、残念ながら、この三代も寛文12年（1672）には亡くなっちゃうんですよね。景気よくなりそうな矢先って感じですかね。よって、四代目が柿右衛門を継いだのは、その翌年くらいでしょうか？喪中に襲名祝いなんてできないですからね。だから、現代でも、そんなくらいで継ぎますしね。

で、翌年はつまり寛文13年（1673）ってことになりますが、実はこの年の9月21日に改元されて、延宝元年になっています。覚えてますか？御道具山の移転に関して記した、唯一の史料である『源姓副田氏系圖』。それによると、副田喜左衛門日清さんから数えて三代目の副田藤次郎清長さんの項目に「延宝年中御道具山大川内へ移居屋敷永代御免地二被仰付」ってなってます。よーするに、延宝年間に南川原山から大川内山へと御道具山が移転し、御道具山支店長の副田さんちも大川内山に移り住んだってことです。

ねっ、そうすると寛文年間に御道具山で使っていた南川原山の施設はすっかりいらなくなるでしょ。それを柿右衛門さんちに下げ渡したとすれば、すごくシックリくるわけですよ。たぶん、これ以上シックリとくる捉え方ってないんじゃないですかね。

そうすると、やっぱ御道具山は岩谷川内山から直接大川内山じゃなくて、間に南川原山を挟んでいたことになるわけです。微々たる高級品しか焼いてない大川内山と違って、南川原山は基本的に

山まると高級品焼いてるわけですから、当時としては副田さんちが管理する御道具山支店は南川原山に置いとく方が、調達のやり繰り上とかはるかにメリットは大きいはずですからね。

ということで、本日はここまでにしときます。（村）

有田の陶磁史（384）

前は、藩が柿右衛門さんちに、唐臼小屋やら赤絵窯やらあれこれ払い下げをするって「覚」は、寛文 12 年（1672）に三代目の柿右衛門さんが亡くなった後、四代目が稼業を継いでからじゃないですかね～、って話をしました。

つまり、『源姓副田氏系圖』にあるとおり、寛文年間（1661～73）頃には御道具山は南川原にあり、延宝年間（1673～81）には大川内山に移されたので、藩が持ってた窯業関連の不動産が必要なくなった。そんで、御用焼物師であった酒井田さんちにあげるわってことになったって筋書きです。ですから、不遜にも現在の通説に逆らって、ここでは御道具山は岩谷川内山から直接大川内山じゃなくて、間に南川原山を挟むって捉え方をしたいなって思っているわけですよ。

ちなみに、しつこいかもしれませんが、長々と記してきましたので、これまでお話ししてきた内容をいちいち覚えてられませんよね。自分でもそうですから…。なので、ちょっと振り返りしときますね。

そもそも、現在の通説である岩谷川内山から大川内山へと直接移転という話の根拠は、あくまでも考古学的な発掘調査による両山の技術の類似性であって、文字史料なんかが残っているわけじゃありません。いや、このブログでは南川原山を間に挟むって捉え方に一票ですが、あくまでも、岩谷川内山と大川内山の技術の類似性について否定しているわけじゃありませんよ。むしろ、お話ししたように、積極的に直接技術移転があった、つまり、人々の移動があったって考えています。でも、それと御道具山の移転は別の話では？って言ってるわけです。

たとえば、示したように酒井田家も初代柿右衛門時代とか、つまり岩谷川内山に御道具山があった時期にも、御用品を製作していることは、例の三代柿右衛門さんの「申上口上」に、「親柿右衛門南川原へ罷在、御用物之儀者不申及、」や「赤絵物之儀も先年之様二被仰付可被下候。」とあることから明らかです。つまり、御用品のすべてを御道具山で賄っていたということではないことが分かります。

よって、大川内山で鍋島様式の製品が製作されていても、それだけが御道具として使用されたとは言えないということです。しかも大川内山では、1650年代後半頃にほぼ同時に開窯した窯場は、現在藩窯と目されている日峯社下窯跡だけじゃなくて、少なくとも清源下窯跡や御経石窯跡などもあります。3窯ともにコンセプトとしては、まん中がスッポリ抜けた、最高級品と最下級品を一つの窯場で組み合わせてるってことで共通します。ただ、日峯社下窯跡だけが、現在古美術業界なんかで初期鍋島として位置付けられてるもんが出土しているってことです。

じゃー、御経石窯跡や清源下窯跡なんかで出土している高級品の方は何様式？ってことですが、出土品が主に白磁や青磁なので、高台の外側面に文様を配するものがないってだけで、高台も高いし、きっと日峯社下窯跡で出土していれば、鍋島様式って言うでしょうねって類いのもんなわけです。

これって、日峯社下窯跡で高台の外側面に塗り潰し文様を巡らすってルールが確立したので、そこにしかないだけとちゃいまんの？って思ってしまう。少なくとももっと後になれば、そういうものが御用品の専用様式として使われたとは言え、これら3窯が併存していた時期からそうであったってエビデンスはどこにもないわけです。

たとえば、当時南川原山に御道具山、つまり副田さんの管轄する御道具山支店があったとすれば、そこを拠点に日峯社下窯跡からも調達するし、御経石窯跡や清源下窯跡からも、それから酒井田さんちからも調達するってシステムであったとしても何の矛盾もないわけです。

ってことで、もうちょっとこの話を続けようと思いますが、まだ長くなりそうなので、本日はここまでにしときます。（村）

有田の陶磁史 (385)

今回は、御道具山って、現在の通説である岩谷川内山から直接大川内山じゃなくて、やっぱり昔々から言われているとおり、間に南川原山を挟んでたんじゃないですかね〜って話をしてみました。

つまり、少なくとも岩谷川内に御道具山があった時期には、そもそも鍋島様式自体がなかったわけで、よーするに古九谷様式と呼ばれているものの中に御道具が存在していたわけです。それが大川内山では、なぜ突然、高台の外側面に塗り潰し文様を巡らすような、いわゆる初期鍋島様式の製品が御道具の専用様式ってことになるんでしょうね？ってことです。

その鍋島様式が開発されたのは、大川内山の中でも日峯社下窯跡という窯場ですが、同質の製品はほかにも清源下窯跡や御経石窯跡にもあるわけで、単に、高台側面の塗り潰し文様がないだけです。それで、何を根拠に塗り潰し文様を巡らす方は御道具で、ない方は御道具じゃなかったと言えるんでしょうね？

もちろん、後にはそういうもんを専用様式にしたんだと思いますよ。でも、岩谷川内山にはないのに、直で御道具山が移転したのなら、何で大川内山ではそれが突然専用様式って発想になるのか疑問ってことです。専用様式になるにしても、少し時間かけていいんじゃないですかね。

確かに、鍋島様式はオリジナリティーの高い様式で、圧倒的に磁器の生産量の多い有田には皆無です。つまり、その生産量で圧倒する有田などで、同じものを作らせなきゃ、藩としては、一銭も掛けずに、付加価値を高くすることができるわけです。それに気付くまでに、きっとちょっぴり時間が必要じゃないってことです。

話は戻りますが、1660年代前半頃に、酒井田さんちが景気悪いので、磁器生産や〜めたって時期がありました。お話ししたとおり、酒井田さんちは、ほんとズブズブに藩の御用品潰けにされてたにも関わらず、いきなりハシゴを外された感じで、三代目の頃には注文してくなくなっていました。そりゃ困りますよね。

でも、もし、その頃には御道具山が南川原山にあって、そこで藩が自ら生産していたとすれば、話は違ってきます。先ほどお話ししたとおり、たぶんその頃だと、まだ鍋島様式だけが御道具の専用様式にはなっていなかったはずですよ。というか、南川原山を間に挟むとすれば、そこには鍋島様式はないわけですから、そうとしか捉えられません。

そうすると、藩の御道具山で生産していたものも酒井田さんちで生産していたものも、製品の様式としては同じはずですよ。だったら、わざわざ酒井田さんちに注文する理由自体なくなりますよね。

ということで、本日はここまでにしときます。（村）

有田の陶磁史（386）

今回は、きっと南川原山に御道具山があったとされる寛文（1661～73）頃までは、藩が所有権を持つ南川原山の登り窯の焼成室…、例の三代柿右衛門さんからの払い下げによって文書にあるように、一室持ってた可能性が高いように思いますが…、そこで自前で生産した以外にも、大川内山や南川原山なんかの複数の窯場から御道具を調達してたんじゃないですかねって話をしました。

つまり、まだ大川内山の日峯社下窯跡のオリジナルスタイルである鍋島様式だけが御用品の専用様式としては確立しておらず、その他の様式のものも適宜使われていたのではってことです。

そうだとしたら、やはり何も御道具山をわざわざ大川内山に置いとく必要がないですよ。だって、御用品にしたいクラスの上質の製品をウジャウジャ生産していたのは、当時は大川内山じゃなくて南川原山ですからね。

ただ、この時期藩が所有していた南川原山の登り窯の焼成室と言えば、たぶんというか、ほぼ間違いなく柿右衛門窯跡だと思いますが、そうすると、生産していた製品の様式的には、柿右衛門様式が完成する以前の、染付製品で言えば、いわゆる藍九谷なんて呼ばれているタイプのものとか

考えられないわけです。柿右衛門窯跡の出土品でも、この時期にその他の特殊な製品なんて見当たりませんしね。そうすると、藩直営で生産していたものも、酒井田さんちで生産していたものも同様なものってことになりますから、あえて酒井田さんちに御用品を注文する理由がなくなります。

初代の喜三右衛門さんの頃から、酒井田さんちはズブズブの御用品漬けにされてきたわけですから、いきなりハシゴを外されて御用品の注文を打ち切られると、そりゃ工房の生産体制ズタズタでしょう。だから、寛文期と言え、一般的には経済発展して景気の良かった頃ですし、有田自体も本格的な海外輸出時代を迎えて絶好調って時期に、酒井田さんちだけが一人負けって状態になったのかもしれないね。

前にお話ししたように、柿右衛門さんちは、藩に登り窯の焼成室一部屋と唐臼小屋を払い下げて下さいなっようお願いしたところ、唐臼小屋ほかいっぱいオマケまで付けてくれたけど、なぜかその中に本窯の焼成室は含まれてませんでした。理由は分かんないですけど、まあ、あえて思い当たることをお話ししておく、と、登り窯造り替えるからかもしれませんね。

藩が窯室を持っていたとすれば、柿右衛門窯跡って話をしましたが、そこには A、B の 2 つの窯体がありました。同時並行ではなく、B 窯が古く、その廃窯に伴って A 窯が築かれたと考えられます。その B 窯から A 窯への移行が、たぶん 1670 年代頃、つまり延宝年間頃だと考えられます。つまり、払い下げるにも窯自体がなくなったってことです。

ということで、本日はここまでにしときます。（村）

有田の陶磁史 (387)

前回は、寛文期（1661～73）っていう貨幣経済が発展し、国内の景気も安定的に推移して、有田は海外輸出でウハウハ、大市場の江戸の整備も進みつつあって、磁器市場から中国は撤退したまままだし、まさに有田にとって我が世の春が訪れつつあったような時期だったわけですけど、柿右衛門さんちだけは逆に大不況に見舞われてたってご不幸なことになってました。

その原因の一つは、別に史料はないですけど妄想的には、柿右衛門さんちって初代喜三右衛門さんの頃から、藩にズブズブの御用品漬けにされてたもんですから、いざ御道具山が南川原山に移ってきて、柿右衛門窯跡っていう柿右衛門さんちと同じ登り窯の一室を使うことになったら、注文してくれなくなって万事休す。たとえば、大川内山の製品なんかだと、南川原山の御道具山とは違うスタイルの製品が作られてたんでバッティングしなかったですけど、柿右衛門さんちと南川原山の御道具山製品だと、完全に同タイプの製品になってしまいますからね。

でもね。それでも、たぶんその後も藩は柿右衛門さんちに注文してくれなかったみたいですよ。6代柿右衛門さんの頃の享保8年（1723）付けで「口上手続覚」って藩に出した文書の控えを残してますから。これ、前に一部引用したことがあるんですが、ツラツラと先祖の由緒を書いて、近年ぜんぜん御道具なんかの注文してくれないんで、自分もだけど、職人達も難渋してます、だから注文してねって感じで…。なので、再び注文が来だしたのはこの後でしょうね。

まあ、詳しくは機会をあらためてお話ししますが、藩の注文来ないからって、そりゃ御道具の話であって、藩関係や他の大名その他なんかからの注文自体は受けてるんですよ。たとえば、元禄4年（1691）3月付けの「御内様御用御焼物」って注文帳なんかも残ってますから。その前の貞享5年（1688）にも、下級役人2人の連名なんで本人たち用じゃなかったと思いますが、刺身皿26枚となます皿33枚とかね。

まあ、でも17世紀後半には藩はあてにならなくなってしまったわけですから、柿右衛門さんも食ってくためには何とかせにゃあかん。まあ、それでメチャ努力したんでしょうね。注文のなかった延宝頃から元禄頃って言えば、柿右衛門様式は完成させるし、矢継ぎ早に古伊万里様式も形にになってしまうみたいに、逆に、一番いいものを作りだした時期なんですよ。生活かかっているんで、真剣さが違いますよ。それに、海外にも結構売ってますしね。

ってことで、柿右衛門さんちのことは、後ほどその時期についてお話しする際に詳しく触れるとして、次回はじゃー大川内山はどうなったって話をしてみたいと思います。（村）

